

佛
教
の
要
義

山
邊
習
學
著



特 223
136



始



特 223
136

佛 教 の 要 義

山邊習學著




法 藏 館 刊



自序

「風の光りを吹くが如く、刀の水を断つが如し」といふ經文がある。何かしら考へさせる強い示唆がある。一體、風が光りを吹きうるだらうか。吹いても滞るところがないとすれば、吹けないと同じである。刀で水が切れるか、勝手に刀が廻せるとすれば、切つても切れぬと同様である。吹くと云へば吹き拂はねばならぬ。切ると云へば切り分たねばならぬ。若しさうだとすれば、この場合吹くことも出来ず、切ることも出来まい。

併し風吹いて木の葉亂れ、光影互に交錯すれば、矢張り風は光りを吹き拂うてゐるのでないか。況んや「日うら／＼波間々々に風光る」と歌ひ出せば、風は光りと、光りは風と一つに溶けて流れて、この世ならぬ一如の相を示す。更に昔、剣道の名人は流水を切つたと言ひ傳へられてゐる。事實の眞偽はともあれ、かう言ひ傳へられる所に、何かの密意があるのでないか。

宗教的體驗を光りとすれば、言葉は風のやうなものでないか。體驗は説き得ない善だが、亦説き得ないこともあるまい。この故に説いて一字も説かないといひ、説かないと云ひながら説き去り説き來つて滯る所はない。所詮は人間の常並の論理が沈黙して、正しく道に入つた人の獨自の動きが、風の光りを吹き、刀の水を斷つる舉に出でうるのであらう。

ラヂオの放送は、全く耳の約束の下に、教法を傳へる役目を演ずるのであり、亦限られたる短い時間に、纏つた話をせねばならぬ。困難な仕事である。特に今回ののは突然の依頼で、準備の時間もなく、而も止むなき事情の下にそれが東奔西走の間になさねばならなかつた事等で、思ふやうにいかかなかつたこと夥しい。といつて、之は一體私の信念であるが、話は言葉の端々までに注意して仕立てあけると、成程一般にはよいには違ひないが、魂が入りにくい。上手にはなれようが、それは藝に墮ちる外はないから、私としては、形式ではあれより外いたし方がないのだと思ふ。つまりは光りを吹き得

ない風となり、水を斷ち得ない刀として残る外はないのかも知れない。

今や、更に耳の約束を眼の約束にしました。こゝにももう一つ翻譯の善い方法が撰ばるべきであらうが、其成果を収めることが出来なくなつて仕舞つた。省みて慚愧に堪えない。唯十日間に互る放送中多くの方々から涙ぐましい程の御禮狀を戴いたこと、中には記念の品まで送つて頂き、又は毎朝つゞいて御手紙や御電話を頂戴したこともあつた。その中には、一二親切な御忠告を下さつた方もあり、項目の一二に就いて、前もつてよくやつて欲しいと懇囑せられた方もあり、ほんとうに身に沁みて衆生恩の忝けなさを感じた次第である。

終りに「華嚴經」夜摩天宮品の一句をあけて序文を結ばう。

「音聲は佛にあらず

聲を離れては亦佛を知らず

此理ことりいと深し

若しよくわきまへ知らば
道をわがものにせん

昭和第九初夏

洛東三昧窟

著者識

目次

第一講 一度は眼覺めよ……………一
 佛陀の意味—聞法の資格—悪とは何ぞ—青年を主とす—眼覺す方法—
 眼覺めた實體

第二講 自燈の教へ……………一五
 字眼—各自の實踐—自燈の意味—病氣の眞義—社會生活相—首切りの
 名人—鐵砲に向ふ劍客

第三講 教の要……………二九
 教の働きかけ—人生の戰勝者—第二の我—鬼から佛へ—潛毒の治療

第四講 佛の所在……………四〇
 現身佛と法身佛—佛のありか—佛を見る者

第五講 佛の大慈悲……………五一
 大悲發生の動機—人間愛の任務—實在の聲—幸福の開顯—雲の藝術性
 —ふくよかの心

第六講 佛の四大願……………六四

誓願の意味―願と人格―自利と利他―世尊の人間觀―眞の若返り法―
悟りの實際味―理想と反省

第七講 我に語る……………七六

教語する者―呼ぶ者呼ばるゝ者―徒に集める者―琴に命令する王様―
眞の所有者―富める貧者―靈の勝利

第八講 信のこゝろ……………八九

善き伴侶―徹底的の光明觀―輝く純情―寂寥の人生相―功德を受ける
手―莊嚴境の獲得

第九講 婦人の教へ……………一〇三

婦人の眞相―最端の生活者―女性の特異性

第十講 願ひが満される……………一一三

盗みは止まぬ―不相應が盗み―志願の成就―普澤しても塵末にするな
―盗みと怖れ

第一講 一度は眼覺めよ

「何人も、もしまことに自分を愛するならば、よく自分を悪から守れ。

若い時、壯んなる時、または老いての後でも、一度は眼覺めよ」

〔新譯佛教聖典〕國民版二五四頁〕

今回、「佛教の要義」といふ題目の下に十回に亙つて連續の御話をするこ
なりました。最初、この文を選んだのは、よく佛の教といふ意味がはつきり
と表れてゐるからであります。

佛陀の
意味

「佛」とは梵語で、詳しくは「佛陀」(Buddha)であるが、略して「佛」といふ。その意味は昔から覺者と云はれ、即ち眼覺めた者、悟つた者の意である。迷ひに眠つてゐる者が凡夫で、悟りに眼覺めた者が、佛である。それであるから佛敎とは、覺めた者が眠つてゐる者に呼びかける言葉を意味する。上の本文はいかにも佛が佛としての能きとその意味とを適切に表はしてゐると思ひます。

開法の
資格

初めの「何人も、もしまことに自分を愛するならば、よく自分を悪から守れ」とあるのは、最程限度に於ける佛法を聞き得る資格があげられてゐると思ふ。大凡、人間の機類に三種あり、第一の人は、自暴自棄に陥つてゐる者で、「もう自分などはどうなつてもかまはぬ、どうでもなるがよい」といふ捨鉢になつてゐる類である。かうした人は一寸手のつけやうがな

い。大切な自分を捨てゝゐるので、勿論他人のことなどはてんから問題になる道理はない。此種の人は佛法を聞き得る資格がないのである。第二の人は、自分を愛してゐる人で、通常人である。一般世間は此種の人々が多く、従つてこの立場が主となつて動いてゐると思ふ。自分を愛するから、ともかくも自分に關係のある他の人々をも愛してゆくといふことになる。つまりそこに責任の主體があるわけで、不純の分子さへ取り除けばよいので、教化の對象となり得るわけである。そこで今は之を主としてあげたのであります。第三の人はもう一つ進んで他人を主として愛する人である。自分のことはともあれ、他人の爲めに働かうといふ類でこれは完成した人である。この種の人でも法を聞いてゆくには差支がある筈はないが、こゝにこの種の人をあげないのは、多くの人達が洩れることを恐れるからであります。

それであるから、「人もしまこと己を愛するならば」と呼びかけられた。こゝに道の普遍性がある。第一の自暴自棄の人達も又いつかは自分を愛するといふ立場に歸るに相違ない。さうなつたら佛の教へに耳傾けるであらう。夫故に苟も自分を愛する人であるならば、佛敎を聞く資格があるわけである。

悪とは 次の「よく己を悪から守れ」は、そのまゝ「自己を愛する」こと何ぞの「まこと」のすがたをいうたものである。多くの人々は自分を

愛しても「まこと」のすがたで愛してはをらぬ。まことに自己を愛するならばよく「悪」から自分といふものを守つてゆかねばならぬ。今は間違ひを正して下さる教へであるから、「悪から守れ」といふのであるが、他の言葉で申せば正しき愛に歸れ、まことの愛に眼覺めよといふのである。それならば、こゝにいふ「悪」とは何んであるかといふと、廣い意味に取つて、様々なる誘惑を指したも

のと解すべきであらう。人生は様々な誘惑に満ちて居り、到る處に陷阱が設けられてゐるといつてよからう。まことに自分といふものを守りたてゝゆく人に取つては、最深の注意が必要である。人は一般に漠然として感覺的に好ましいことに靡いてゆく。そしてそれが自分の道、自分を愛する道だと誤る。これは云はゞ春の夜の浅い夢のやうなものだ。この夢から醒めるのである。佛は實にこの迷妄の夢から人々を覺めしめる能らきある爲めに佛陀(覺者)と名け給ふ。

青年を 次の文は正しく本文の主眼といふべきで、「若い時、壯なる時、主とす 又は老いての後でも、一度は眼覺めよ」と、第一に青年に呼びかけてある。私はこゝに特に聲を大きくして、皆様に申したい。それは長い間に誤られて、佛敎といふものは老人の聞くべきもので青年時代には聞くことは要らないといふ考へ方である。この誤られた考へ方が都鄙を通じて行き亘つて

ゐるのは驚くの外はない。これはつまり佛の教へは年がいつてからのみ聞くべきものだ。と片附けて仕舞うたのであります。實の處、大聖世尊は御存じの如く青春の時期に深く人生の實相に思ひを潜められ、二十九歳で王城を脱けいで、三十五歳で悟りを開かれ、その後の教化はもとより智愚老少善惡を擇ばず、御縁のある人々を眼覺されたのであるが、どちらかと云へば、青年、壯年時代の人々が多く感化を受けたことは、第一に佛弟子の事蹟を見れば、明瞭であります。數千人の弟子は殆んど大部分が、青年、壯年時代の人達であります。いふまでもなく佛の教へが眞實であるとすれば、それは大切な人生旅行の案内書でありますから、第一に歩みを進ぶ青年時代に最も必要であるわけである。夫故に第一に「若い時」と青年に向つて呼びかけられた。併し青年時代に眼をさます機會を失うた壯年時代の人には、こゝに驚いて眼を覺まさなければならぬ。

どちらかと云へば、此時代の人は青年時代と比べて困難であるとも云はれませう。人間の生活に深入りして、欲も深くなり、用事も多くなつて佛法を聞く機會があつても聞く氣になりにくい。それなればこそ、青年時代を第一に指示せられたわけである。第三に「又は老いての後でも」と宣給ふ、實の處長いきする人は寡いが、青年時代に眼を覺ます機會を失うて老年に及んだ人々でも、御縁があつたら眼覺めるがよいといふのであります。かやうな意味合ひであるから、私はこの機會に從來の間違つた考へをはつきりと茲に是正したいと思ふのである。本文に「老いての後でも」とある如く、佛敎は老人には特にその言葉を付けてをられる處からすれば、先づ第一に青年を教化の第一の對象とせられたことを知らねばならぬ。つまりは眼をさますことだ、「一度は眼覺めよ」である。この「一度は眼覺めよ」の一句が何かしら迫

つてくる力を感ぜざるを得ない。佛陀の意味をはつきりと表すこの一句には、電線を傳ふ電流の如く、吾々を撲たすにはをかぬ力があります。「眼をさませ」はそのまゝ佛の方からすれば「眼をさますにはをかぬ」といふ強い念力であり、「どうしても一度は眼覺してやる、さうさせねばをかぬ」といふ本願にあるのであります。

こゝに注意を要することは、稍もすれば、此句は「一生に一度眼をさますことだ」といふ抽象的な、概括的な受け取り方をするやうに誤り易いことであります。或時、私がこの本文に就いて話すのを聞いて、私の畏友の一人が「若い時、壯なる時、又は老いての後でも」と一々呼びかけられた處が尊い。その各の時期に眼をさますので、一生に一度といつた概括的のことでないと思はれたことは、何んでもないやうであるが、ほんとうによい忠言であると思

はれる。それ故に「一度は眼覺めよ」は、受けとる我々に取つては、その聲を聞いた時に、眼を覺ますことである。「一生に一度」となげやりにするのでない。こゝが甚だ注意を要する處だと思ひます。

眼覺す 「眼覺める」ことは醒めた人にとつては何んでもないことであるが
方 法 眠つてゐる人にとつては容易ならぬことである。私の少年時代に

に或る中學校の寄宿舎にあつたことであるが、一學生が他の同室の學生に頼むには、「僕はどうも朝寢坊で困る。いつも第一時間目に後れるので先生に御眼玉を頂戴する、どうか明朝はゆすぶり起してくれ、萬一起きなかつたら濡れた手拭を額にあてゝくれ、さうしたらいくら寢坊の僕も起きすには居られまい」と懇に頼むので、仕方なしに翌朝、起して見ると、成程起きようとしな。仕方がないので、御本人の依頼の通りに濡れ手拭を額につけると、この男吃驚した

と見えて、むつくと起き上り、いきなりボカン／＼と二つ三つ鐵拳を啖はせて又寢床の中へもぐり込んだ。呆れてものも云へない。いふまでもなく此學生は課業の時刻に遅れて、教師から散々小言を頂戴したので、性懲りもなく、明朝は起してくれといふ。ところが朝になるとそれは忘れて無我夢中で、何をやつたのかわからぬ。只安眠を妨害した奴が其處にゐたので、撲つたまでゝある。昨日頼んだこと一切憶ひ出さないのであります。

この話は眠つたものが醒め悪いことをまざ／＼と示してゐる代表的の挿話であると思ふ。本文にある「眼覺めよ」は吾々凡夫が、自分勝手に拵へた都合のよい夢を見てゐることから覺めよといふことで、世に是程六つかしいことはないかも知れない。世界に多くの賢者達が時代の先驅者として民衆に呼びかけた時に多く迫害を受けてゐるのは、全くこの撲られた學生と同じ立場に置かれた

のだと思はれる。たゞ呼んだ丈では覺めない、ゆすぶり起しても覺めない。そこで約束の如く濡れ手拭をあてたのだが、結果は撲られた丈で何んにもならなかつた。これは餘りに醒まし方が烈し過ぎたので、もつとよい方法があつたかもしれない。又はその時はそのままにして、何かもつとよい方法を講じた方がよいのかも知れない。即ちその覺し方が重要なので、佛教では昔からそれを「方便」と申して大層八釜敷く申すのである。つまりは方法である。急激にやつてはいけないが、そのままにして置いては何の所詮もない。そこにその時代相應に、その人相應に、眼覺すよい方法があるに相違ない。それを考へ出して、教へを實現してゆく、是が佛教徒の務めであらねばならぬ。

眼覺め
た實話

或人が云はれるには「私は六十を越えてから佛法に眼がさめました。それまでは何んといつても此世に頼みになるものは金だと

思ひ込んで金貨を手に入れようとしたが得られない。仕方がないので銀貨を數十圓、金庫の中へ入れて、先づ是で大丈夫と思ひましたが、或機會でかうして銀貨をもつてゐても向ふの山が崩れたら何んにもならぬと考へると、もういけない。矢張りこの世で當てになるものは一つもないとなつて、佛様を信するやうになりました。さて自分の眼がさめて見ると、無學の人ならいざ知らず、立派な學問ある人が、何故にこの佛法に眼がさめないのであらうかと殘念がりましたが、併し又氣がついて見れば、第一自分が、よくも此年まで眼が醒めなかつたことと、同じことだと思ふやうになりました」と。

ほんとうに、此人の云はれる通りである。自分が覺めてみれば、なんで是迄さめなかつたのであらうと思ひ、又なんで他人は眼覺めないのであらうと思はれる。所詮は眼覺めることであるが、それが覺めにくい。なせに覺めないか

と云へば、夢みることが深いからである。「いろは歌」にも「有爲の奥山、今日超えて、淺き夢みじ酔ひもせず」というてあるが、覺めて見れば、淺い夢に過ぎないものゝ、夢みてゐる間は、さまざまも覺めない深い夢である。長唄「道成寺」にも「入合ひは寂滅爲樂と響くなり」と「淺き夢見じ酔ひもせず」の元の言葉を出し、「聞いて驚く人もなし」と嘆いてゐる。寔に驚きはあらゆる善いものを産む母であるが、人は年を重ねるに従つて驚きを失つて仕舞ひます。小兒の時にはよく驚く、風が吹いても、雪が降つても、花が咲いても驚くが、大人は一般にはなんとも思はない。「驚き」を失ふのは、心が純情に遠ざかつて仕舞ふのである。つまりは心が渴くので、墮落の先兆であります。たしか西行法師の作かと思ひますが、

いつしかに長き眠りの夢さめて驚くことのあらんとすなり

といふ歌があります。ほんとうに人生の深みに驚くのです。自分といふものゝ根本の間誤ひに驚くのです。誰でも機会が與へられるならば、屹度かうした長夜の眠りから醒めるに相違ない。これが佛陀の意味であり、さやうに驚くことが、佛陀の心の通うて來たところであり、佛陀と一つになる最初の歩みであるのであります。

第二講 自燈の教

「弟子等よ、汝等おのゝ自らを燈とし自らを頼りとせよ。

他に頼つてはならぬ。

この教を燈とし、頼りとせよ。

他の教に頼つてはならぬ」(同上二六頁)

「一度は眼覺めよ」の教に驚いた時に、吾々は第一に他に向つてをつた眼を内に向けて來ます。外物が中心でない、自分が中心であることに氣付く。つま

り是までうつかりしてゐて、それが生活の根本であるかを知らなかつたのが今度にはつきり、自分自身が生活の根本であることに氣付いて來るのである、それが自らを燈とするといふのであります。

本文は、大體に於いて二つに分れてゐる。一つは自らを燈とすること、これが又二つに分れて、自分を燈とし頼りとする、他に燈とし頼りとしてはならぬといふこと。二つには教へを燈とし頼りとし、他の教を燈とし、頼りとしてはならないといふのである。こゝに點を附した文句はないのであるが、略されてゐるわけである。

字 眼

昔から佛典を味ふには、先づ第一に字眼を見出すことを教へて居ります。字眼といふのは、その一文の要めな文字を發見することである。つまりは文意の中心を把握すること、此れが出来ない限り解らない

とも云へるし、解れば屹度、その大切な文字が躍り出して來るに違ひないといふのである。此一文の字眼は申すまでもなく、自らを燈とすること、此教を燈とすることでありませう。自ら燈となることは、暗い自分が明るくなること、即ち是まで自分といふものはつきり考へて居らなかつたのが、はつきり自分を考へるやうになつた、即ち一つの宗教的反省が起つて、靜かに自分を觀照するやうになつたのであるから、それが自燈である。外から照されてゐるのでなく、自分の心の奥から叡智が輝きいづるので、それは決して自分の思案や分別で拵へ上げたものでなく、全く天地自然の眞の理を打ち出した教法が心に輝き出すのであるから、心の燈はその儘教への燈であります。

各自の實踐

次に「汝等おのゝ」と呼びかけられてありますが、この「おのゝ」に實踐の意味が強く響いてをります。教へは一般に亘るの

であるが、實踐にあつては全く一個人となる。御飯は誰も食べられるものであ
るが、それが實踐に食べられる時は、一人々々の口に入るの、他人がたべて
もこつちの腹はふくれぬ。教へも亦これと等しく、「おのくく」一人々々にそれ
を體驗するのである。つまり受ける方から云へば、此御教へは全く自分一人の
爲めであると頂くことでもあります。この意味をあらはして「汝等、おのくく自
らを」と云はれたものである。「彌陀の五劫思惟の願をよくく案すれば偏に親
鸞一人が爲めなりけり」といふ『嘆異鈔』の有名な文字は、全く此教法の正しい
受け取り方を表したものであります。

自燈の
意味

かやうにして自らを燈とすることは、先づ自らを頼りとするこ
と、即ち他の言葉で申せば自分自身に全責任を負ふことである。
ほんとうの教養の最後は必ずこゝに来るのだと思ふ。常識では、先づ自分の利

益や都合を基にして、他に頼り、他を利用しようとする。それであるから、他
人が自分の思ふやうになれば満足するが、思ふやうにならないと憎んだり怨ん
だりする。甚しいものになるとそれが爲めに他人を傷けたり、又は自棄を起
して自分を害めたりする。そこには眞の中心がない、眞の責任者が無い。全く
氣儘我儘が獨りで働いてゐるばかりで、自分に對する正しい認識もなければ周
圍に對する認識もない。飢えた野獸が生物を見れば、何んでも自分の食餌だと
思ふやうなものである。それは全く盲目的の存在欲の外何者もない。

然るにこゝに教への燈が、この暗黒の心に輝き入るとき、又は心の奥から
輝きいづる時に、吾々は正しく自分を發見するとともに周圍を發見する。つま
り、ほんとうの生活の全容が見え出してくるのであります。こゝにいふ「他」と
は吾々の周圍の一切を指すので、一言にして云へば人生と呼んでゐるものであ

ります。吾々がこの周圍に對して何よりも先に考へてをかねばならぬことは、常に移りつゝあるといふことである。これは人生に對する根本的な考へ方であり、殆んど一般に考へられて居らない。天災地變でも、それが來ない間は、來るものでないと思ひ込んでゐる。是れであるから、若し一朝それが襲ひ來ると驚き慌てる。それは全く來るべきものでないものが來たやうに考へる。交通が便利になると、便利になつたことはあたり前として感謝することを忘れて仕舞ひ、そしてそれから殆んど必然的に起つて來る様々の故障や損害を受けると、まるで自分丈に特別の不幸が見舞うて來たやうに驚き悲しむ。是は矢張り「人

病氣の
眞義

生無常」の意味がのみこめてゐないからである。
更に甚しいのは病氣であります、多くは自分の不養生から病

氣にかゝりながら、それをともすれば、方角が悪いかからとか、何か魔物に祟られてゐるとか、或は日の吉凶によつて起つたやうに考へる。又はそこまで間違はないにしても、病氣に罹れば、どんな種類のものでも薬で必ず治るやうに心得てゐるものが多い。而もそれが治らないとなると、他人を怨んだり、我身を憐んだりする。然るに眞に教への燈に照されて見れば、病氣は此肉身といふものから離れないものである。その道の専門家の報告によると、特に人體の内臟諸機關の構造や、それ等相互の關係が、まことに微細を極めて居つて、實に危いことこの上ないと云はれて居ります。某醫科大學の學生は、卒業近く解剖に従事すると、この危いことが解つて、人間はいつ何時死ぬるやも知れないと感じて、不眞面目な者は生命のある間に楽しい味を知らうと遊里へ奔り、眞面目な者は、宗教の話を聞くとの事であります。それであるから専門家は寧ろ病氣

に罹らないのが不思議であると、今更の如く生命の力又は生存の事實に驚いてゐる次第であります。

之を要するに、病も矢張り吾々の生存に最も緊密な關係ある一の周圍とも云ふべき肉體の變化の一つに過ぎないので、それには治ることもあり、治らぬこともあり、實の處人間の手中に把握するわけにはゆかない。醫師の診察も治療もその他萬般の手當も、必ずしも病氣そのものを絶滅し得るとは云へず、唯出來る丈それ等の故障を除いて、ほんとうの生命の力を伸ばさしめるに過ぎないといふ方が適當であります。

社會生活

更に進んで靜かに考へれば、人間の生活は多くの人々と網の目のやうに連つて居るから、一人の仕事はその様々なる關係で、各

多少の影響を受ける。そして夫等の出來事の本を探せば各の心であるから、吾々は全く自分の思ふやうにゆかない立場にをかれてあるといつてよいと思ふ。自分の心さへ、自分の自由にならないとすれば、まして他人の心は自由になる道理がない。そこには元より法律もあり、道徳もあり、又それ々の善い習慣もあつて、野獸のやうな無秩序な状態にはをかれてゐないが、併し根本的には決して各自の思ふがまゝには行かないやうになつてゐること丈ははつきりと認めてをかねばならぬ。即ちこの社會は私共の生きてゐる限り決して離れることの出來ないものであるが、併し上述の如く決して各人が勝手な振舞ひをなすべき舞臺ではない。そしていつも移り變りつゝあるから常識で考へてゐるやうな唯一の動かぬ場所でないことは明かであります。かやうに周圍の真相をはつきりと見究めることは全く教への燈を自らの燈とした時に與へられるものであります。

首切り
の名人

かやうにして自燈の教へは良に爛れた處へ善い膏藥をはるやうに
適切であり、手厳しいものであります。否な耕かされた心に對し
て聖者の教へは、固いものを摧破する爆彈のやうなものである。間違うた處へ
首を突込んで動きのとれないやうになつてゐる自我、又はいつかは動きのとれ
ない破目に陥るに違ひない自我の頑迷を爆撃するのであります。或は巧な捕手
の投げる取繩のやうにハット思ふ間に縛られて仕舞ふ。氣がついた時はもう先
方の掌中にあるといつたものである。昔、松原街道を鼻歌うたひながら歩いて
ゐた男がある。辻切りの名人が抜打にすばりと首を刎ねたが、餘りの早業でこ
の男は何も知らず歌を續けて歩いたが、松の根に躓いて仆れる拍子に首がガツ
クリ落ちたなどとはよく講釋師の話す處であるが、中には家へ歸つて御そばを
喰はうとして首が落ちたなどといふ。首が長く落ちない丈それ丈、刀の切れ味

がよいといふ譯である。かうした話の中は、通常の表し方では表し得ない微妙
な處が云ひ表されてゐると思ふ。實の處、世尊がおん身自ら燈となつて輝き
出られた時、もう我々の自我の首は刎ねられたのかも知れない。この教への利
刀はもう一度吾々の首を切つたのかも知れない。もう既に骸は投げられてある
のだ。人間の正しく行くべき道が示されてゐるとすれば、只機會が吾々をまつ
てゐる丈である。是は道に眼覺めて自ら燈となつた時に誰でも感ずる處であ
り、そして一つの信念として抱かるゝものであります。その時世界が明るくな
つてくる、今迄は自分も他人の一切も、どこへどう行くべきか少しも見當がつ
かぬ、皆が眼の前の僥倖を握まうと焦つてゐる。一寸先きも解らぬ同志が自分
の都合のよいやうにとのみ算盤をはちいて、他人を出し抜かうゝとのみかゝ
り果てゝゐる。而もその願ひを遂げさせない條件がどれ程あるか知れないが、

それは誰しも計算には入れない。只勝手に獨りぎめを押し通さうとする。その長い道程には、極く僅な人が願ひを果し得ても大部分の人々は取り残される。先に成功を誇つたものも、次の機會には又思はぬ打撃で叩き落される。そこに何んの見通しもなく、信念もなく、希望もない。然るに、自らを深く内より觀、他を正しく外より觀通して、まことの姿を觀れば、はや吾々は輝かしい温かい光りの只中にあることを覺える。誰も皆かうなるべきである。自分のみが偶然にかうなつたのではない。誰しも正しい考へが彼等をこゝへ導くに相違ない。そしてその正しく考へることは既に逸早く萬人に與へられてゐるものであるから、遅かれ早かれ屹度この教へに眼覺めるに相違ないといふ信念が確立するわけである。この世に於いて吾々の最後に立つべき處はこの體驗の上になつた信念の外はないと思ひます。それは自分としては最終の立場であるから生のみ

ならず死をも貫いてゐるからである。

鐵砲に
向ふ劍客

幕末の頃、鐵砲の名人と劍道の名人と不圖したことから口論となつて、遂に果し合ひといふことになつた。恐く如何なる劍術も鐵砲には叶はぬといつた事から劍道の先生としてはそれを是認しては自分の立場がなくなるからとて最後の土たん場までいつたのであらう。扱愈果合ひとすると、此劍客も、飛道具を向ふへ廻すとなると、距離があるからこつちから斬り込んでゆくことは出来ない。もうかうなれば死ぬ外はないと、心靜かに最後の構へをなした。敵に勝たうといふ心もなければ、生きようとする心もない。そこには死生も利害も勝負も超越して只生涯かゝつて鍛へ上げた構へ丈がある。淡として水の如く敵意も恐れもないから微しの動きも見せない。この澄み切つた心境に立つた時、突然鐵砲打ちが「參つた」と叫んで鐵砲を投げ出したので、

初めて我に返つた。敵の語る所によると、相手の五體が、一劍の中へ隠れて寸分の隙もない。そのみならず何かしら一種の迫る力を感じてこつちの方の手が震ひ出したといふ。

これは、數十年前に聞いた話であるが、自燈の教へを味ふに一つのよい註釋として考へられると思ふ。此劍客は最後の立場に立つたのだ。この恐るべき破目に落ちこみながら平生鍛へあげた境地に入つて、何ものをも恐れぬ心境に立つた。かくの如く死生を越えた所は、人間の造つたものではない。天地を貫く至誠、自他を縫ふ自然の大道が輝いてゐる。「自らを燈とし自らを頼りとせよ」とはかやうにして會得せられることゝ存じます。

第三講 教の要

「教への要は心を修めるに在る、故に欲をおさへて己れに克つことにつとめねばならぬ。心に従はず、心の主となれ。心は人を佛ともすれば畜生ともする、迷うて鬼となり悟つて佛となるのも皆此の心のなしわざである。」(同上二七頁)

此本文は大凡三つに分かれます。

第一は、「教への要は心を修めるに在り」。是が此の本文の全體を統へ括つて居るもので、その次に「故に欲を抑へて」から「心に従はず心の主となれ」といふの

が第二段である。謂はゞ實踐の經路とでも申しませう。それからその次ぎ、「心は人を佛ともすれば畜生ともする」から「皆この心のなしわざである」までがその實踐する所の道の内容である。かやうに三段に分かれて居ります。

教の働
きかけ

初めに教の要は心を修めるに在りと申してあるが、前講に於ける自らを燈にせよといふことをもう一步突込んでいつてゐるので即ち自らを燈にするといふことは、同時に教を燈にすることで、今はその教と心とが一になつた處をいふのであります。

今「教の要は」といつたのは、その目的から云へば、自らを燈とすることであるが、今はその實行方法を主にしてゐるので、教が先に立つて来る。吾々の心は生な材料であるからそれが鍛へられなけりやならない。随つてそれを鍛へるのが即ち教である。病氣の場合に薬が先に立つと同じやうに、實踐にあつて

はこの教が働き掛けて来る。そこで「教の要は」と云うたのであります。「要」といふ文字は扇の要の意味で、扇は末擴がりになつてゐるが、段々この各の骨を辿つて來ますと要の一點で收まつて来る。その要によつて扇子全體が持つて居る譯である。幾ら大きな扇子でも一點の要で維持せられ、形が持たれて居るやうに、八萬四千の法門といはれる澤山の教もその集つて來るところの一點の要は、所詮、我が心を修めることである。即ち自分の心を反省し、鍛へ上げるといふことで、初め第一段のこの文章が全體の總括、まあ頭に被る帽子に當るものであります。

人生の
戦勝者

それから進んで、然らばその「心を修める」といふことは一體どういふことをするのかといふと、次の文章に極めてはつきりと表されてゐる。「ゆるぎに欲をおさへて、己れに克つことにつとめねばならぬ」とい

ふ。「欲をおさへる」といふことが一つ、「己に克つ」といふことが一つ、それから「努力しなければならぬ」といふことが一つ、かやうに三つに分れて居る。併しこの全體は皆いづれかといふと、消極的であるが、次の文章は非常に積極的である。「心に従はず、心の主となれ」といふのがそれである。さてこの「欲をおさへる」といふことは譬へば荒馬をこなすやうな意味で、徒に禁欲するといふことでない、「心を修める」とか「心を鍛へる」といふことは、吾々の欲望に對して一つの制御を施し、鍛錬を加へるのであります。丁度荒馬に跨つて乗つて乗つて乗こなしして遂に名馬にし上げるやうなものである。即ち己に克つといふのは吾々の勝手氣儘に動かうとする心をしつかりと押へて或時は理で諭し或時は吐り鞭ち又或時は人情で温める。かうして人格を育て上げてゆくのである。教養といふのは是より外にない。つまりしつかりと内から善く心を太らし

てゆくのである。一體この「己に克つ」といふことは世尊が證りを開かれた時に云はれた言葉で「われ世に勝てり」と云はれた。つまり自分は世界を征服したといふのである。是は自分に克つた時に経験されたものである。自らに克つ程困難のことはない。自分を克服することは世界を克服したのであつた。これは他の言葉で云へば自分が不死の世界の一員となつたと自覺したからである。即ちこの己に克つことは同時に永遠の生命を得たことで、世尊は「われ世に勝てり」の次に「不死の鼓をうたんと云はれた。人の世の凡ては死の影に脅かされてゐる。佛は實にその死を克服せられて、一生涯不死の鼓を打たれたのであつた。まことに教の行き渡る處、常に光り輝き、喜びが湧き起るのは、人々をして死を征服せしめ永遠の生命を獲せしめるからである。勝利の喜び、凱旋の喜びであります。

第二の我

次は「心に従はず、心の主となれ」とあつて、極めて難解な文字であるが、實踐の上では極めて平凡な文句であります。理窟丈けで解釋しようとするに難しい。即ち心に従はない、といふのは一體誰が従はないのか、心の主となれといふのは誰が一體主となるか、吾々は自分の心を自分の主として考へて居る、その心に従はない、さうして心の主となると云ふ、甚だ理解しにくい。併し實踐の上に於ては極めてありふれたことで、酒を飲む、大抵にして止めようか、止めまいかと云ふ、その止めないで飲まうといふその心に従はないで先づ止める、といふことになればその心の主となつた譯であります。

それで心の主となるといふことは、誰が主となるかといふと、謂ふまでもなく、自らを燈とし教を燈としたもの、即ち教と一つになつた我である。今

までは教と離れて居つたから心が統一を失つて、正しい立場、動かない立場に立つてゐなかつた。何かするとぐら／＼と動いて、傷いたり、悩んだり、怨んだり、妬んだり、喜んだり動搖極まりない。處が教と一つになつてみると其處にしつかりした地盤に立つて来る。もう一つ喩へて云へば、丁度水脈に觸れた井戸を掘つたやうなもので、そこには滾々とてし盡きない水が流れてゐて、いかに旱天になつても干上る氣遣ひがない。汲めども／＼いつも新しい水が出るやうなものである。吾々の欲望は土のやうなものであるがそれを掘抜くとほんとうの輝かしいものが生れて来る。即ち教と一つになつた我で、或は「第二の我」とも説かれてありますが、このほんとうの我が「自らを燈とし教を燈」と

鬼から佛へ

第三に「心は人を佛ともすれば畜生ともする、迷うて鬼となり、

悟つて佛となるのもみなこの心のなしわざであるが、人間の心といふものは不思議なもので、佛にもなれば鬼にもなり畜生にもなる。心の働きは實に千變萬化である。迷うて鬼となり悟つて佛となるといふことについて面白い白隠禪師の逸話がございます。禪師が駿河に居られた時備州侯の家來で織田平次郎信茂といふ人が禪師を訪ねて教を受けた。すると禪師は「あなたは是までどんな風に聴き、どんな風に實行して居りましたか」、信茂「わしは佛法が好きでございますが、近頃は爲に一つの病を持つて居る譯であります」、「病とはどうか」、「それは外のことではありませぬ、初めには或人に會ひまして、一切唯心の道理といふものを聞きまして、何でも人間は心の持ち方一つだと落着いて居りました處、又或人の教を聞くとそれがぐらついて、一體この地獄、極樂といふものは吾々の心の中にあるものか無いものか、外にあるか内にあるかど

うも分らん、つまり鬼と佛が何處にあるのか分りませぬ、そこが承はりたので罷り出しました」、すると禪師は大喝一聲、「一體貴様は何者ぢや」信茂聲に應じて「武士でございます」禪師嘲笑ひながら「何と申す武士といふか、若し武士ならば君の爲に忠を盡し、事が有つたらその身を敵の刃に委ねるだけでよいではないか、然るに此奴め、徒に餘道に迷ふ、貴様でも武士といはれるか若し武士とならば山伏、野武士だらう」腹が立つて仕様がなすが信茂は虫を殺して「どうかそこの處をお教へ願ひたいものである」禪師「まだそんな馬鹿なことをいつて居るか、貴様は山伏か野武士ならまだ人間の仲間でないが、先づ鯉節位なもんだらう」これを聞くと信茂は腹が立つて思はず刀の束に手をかけたが禪師は平氣である「さうだ鯉節ならまだ勝手の用にも立つが、手前見たやうなものは世間の役に立たぬ喰ひ潰しであらう」喰ひ潰し穀潰しは武士にとつ

ては最後の侮辱であるから、彼は烈火の如く怒つて己れ！といつて刀の鞘を拂ひ眉を逆立て満面朱を注ぎながら禪師を追つかけた。すると禪師は堂上階下を逃げ歩いてどうしても斬れない。暫く立つて後を顧み、「あら恐ろしい地獄の鬼が来た」といひました。その一言で流石は平生道を修めて居つた男でありますから、信茂は總身汗を流し満身の怒りはどこかへ逃げうせ、そのまゝ刀を投げ捨て、低頭平身してしまひました。そこへ禪師がやつて来て、「あゝ有難いことだ極樂の佛が来た」といはれたといふのであります。(佐々木月推全集「第

治 療

このエピソードは、流石に白隠禪師のやうな峻嚴な銳鋒の持主でなければ出来ないことで、實に痛快極まるものである。そして只今の迷うて鬼となり、悟つて佛となるのは皆この心の爲業であるといふ活きた註釋である。侮辱せられた時にこの武士は烈火の如く腹を立てたが、それは自

分の持つて居るやくざな心が全體外へ出た譯で、丁度病毒が體の中にある間は薬が效きにくい、すつかり體の外へ出た時にその薬に治される。禪師はその方法を採られた。慾を抑へるといふことも己に克つといふことも、通常の意味の道德の修養とは違ふので、吾々の心の中に潜んで居るあらゆる害毒、怒り腹立ち、妬み、恨み、さう云ふやうな總ての煩惱をみな外へ叩き出して、直にこれを一括して鍛へあげる、變質される、即ち鬼を佛にします。實に白隠禪師の面影が躍如として居る譯である。かやうに味つてゆくと、「教の要は心を修めるにある」といふ文の内容が會得せられると思ひます。實際人間の心程不思議なものはないが、これをどう取扱ふか、どう仕末するかといふことに就いて佛は實に痒い所へ手が届くやうに教へて下さるのであります。

第四講 佛の所在

「佛は肉身ではない、悟りの智慧である。」

肉身はこゝに亡びても、悟りの智慧は永遠に教へと道とに生きてゐる。

それゆゑに私の肉身を見るものが、私を見るのではなく、私の教を知るものが、私を見るのである。」（同上三〇頁）

佛の所在と云ふ題であるが、詳しく云へば、佛とその所在といふ意味であります。今は所在といふ方面に力をいれて、この題目を出したのであります。本

文は大凡三段に分れ、第一段は、「佛は肉身ではない、悟りの智慧である」とあるから佛そのものに就いて述べ、次に第二段「肉身はこゝに亡びても、悟りの智慧は永遠に教へと道とに生きてゐる」と正しく佛が何處に居られるかといふ佛の所在を明かにして居ります。次に第三段「それゆゑに私の肉身を見るものが、私を見るのではないといつて、佛を知るもの、もしくは體驗者といふ者はどういふ者であるかといふことに就いて述べてゐる。勿論一續きの文章であるから、必ずしも三段にはつきり區別を付ける譯にはいかんが、大體この三つの區切を付けて味つて見ると、はつきりするやうであります。

現身佛と
法身佛

第一、「佛は肉身ではない、悟りの智慧である」といふ實に僅かな言葉であるが、大きな言葉であり又深い言葉であつて、この一句の中に歴史上の釋尊、所謂現身佛と、歴史を超えた永遠の存在なる法身佛が掲

げられて居るのであつて、そこに現實の佛陀から理想永遠の佛陀へ進んでゆくところの精神上的の経路が現はされて居ります。又昔から今日迄佛教に於ける最も重要な大問題が、この一句の中に含まれて居る。一體、吾々が佛の教へを學ぶのは、唯二千五百年前に誕生せられた歴史上の佛陀、即ち現身佛の釋尊を學ぶのではなくして、今日只今現にましまして吾々に働きかけて居られる法身の佛陀を學ぶのが佛教の所詮であらねばならぬ。若しさうでなければ、佛教といふものは古い物語りに過ぎないものとなつて今の私達の血や肉となることは出来ないこととなる。

さう云ふ風に考へて來ると、此の一句の中に總て重要なものが含まれて居ると云ふことが出来るのである。今咲いて居る櫻の花も暫時にして散つて行く。併し次の年になれば又同じやうな櫻の花が咲いて來る。花は年々に咲いて

は散り、散つては咲く、けれどもそこに表して居る美は散ると云ふことはない。長く人の心の中に残り、或は詩歌に歌はれ、畫に描かれ、或は音樂にも演奏される。謂はゞ現身現實の櫻は咲いては散り、その世に在る時間は洵に短い、けれども櫻が吾々に残してくれる櫻の命、櫻の魂、櫻の美そのものは永遠に吾々に生きて行くのである。そこに吾々は永遠の櫻、法身の櫻を見ねばならぬ、又見てゐる筈なのであります。經典の中に澤山の諸佛菩薩が擧げられる。藥師如來は心の病を除いて下さる方である、と云ふので藥師如來と云ふ名で表されて居る。又大日如來は、遙に絶對の世界から吾々に光を投げる、それは宛ら大日輪の如きものである、と云ふので大日如來と表象される。又永遠なる壽命、救ひの主として阿彌陀佛が表されて居る。恰も薔薇の花と云ひ、牡丹の花と云ひ、菊の花と云ひ、それ々の花の姿、形、随つてその花の表し

て居る獨自性と云ふものは、各異つて居るが、花の表して居る美そのものは、やはり一つと考へることが出来る如く、様々の佛菩薩も元へ戻して見れば、即ち覺の智慧である。人間の賢しい猿智慧でもなく、情慾の手先になり奴隸になつて様々の計畫を立てる悪い智慧でもない。澄み渡つてゐて、そして物の奥底を本當に見透して、濫い心に潤はされて居る處の智慧、宛ら太陽が熱と光を以て此の世を照して居るやうな悟りの智慧であります。

佛の
ありか

第二、然らばその佛は何處に居られるか、佛の存在、在處であるが、是は「肉身はこゝに亡びても、悟りの智慧は永遠に教と道とに生きてゐる」と明かに示されて居る。歴史上の肉身を有てる釋尊御自身は此世を去られた時になくなつて仕舞はれても、佛の精神である處の悟りの智慧はとこしなへに教と道とに生きて居る。佛は絶對者であるから、佛の所在を掴む

譯にはいかない。ちやうど火が何處にあるかと云うても火の所在を掴み得ない。しかし火はその因縁和合する處、何處にもその姿を現はして来る。佛も亦その通りで、御縁さへあれば人生のどこにでも現はれて下さる。火が何處にあるか、火のある場所を確かに押へることは出来ぬが、火は吾々が或る仕掛を設ければ薪の上にも現はれ、ストーブの中にも現はれ、電燈にも現はれる。斯う云ふやうな意味に於て佛の人生化とでも云ふか、佛の人生に現はれる場所、その在處が何處にあるかと云ふと、「教」と「道」とに生きて居る。佛に常は教への中に居られる。昔から八萬四千の法門と謂はれる程、色々な形に於て、佛の教法が現はされて居る。大藏經若くは一切經と云ふものは佛の説かれた經典若くはその註釋の集録であるが、印度に於て澤山出来上つた經典が支那に西曆紀元二世紀の中葉から大凡十一世紀の初葉に互つて前後約八百有餘年の間支那

人がそれを大體譯了して、今日所謂一切經若くは大藏經といふものが編纂せられたのである。爾來日本にその經典が渡り、今日まで盛んに其の經典の翻譯が行はれて、徳川時代に黄檗宗の鐵眼禪師が一切經の翻譯をしたことは最も有名である。斯様にして教法を護持する爲には非常な努力と犠牲が拂はれて居るが支那に於ては度々の法難があり、迫害があつた爲に、その經典を石に彫付けようといふ恐ろしい努力まで企てられた。それ位皆が教法護持の爲に努めたのは何であるかといふと、佛の教、佛の精神といふものが人生に現はれる形が教法である、佛は永遠に「教」に生きて居られるからである。その次に「道」といふ字が用ゐられて居るが、道は恐らく實踐を云うたのであらう。道といふ言葉が大體實踐の意味を含んでゐる。道は吾々が踐む爲に存在する。踐まない道といふものはあり得ない。故に此の道は、佛の教を吾々が實際實踐して行くことを意

味する。經典、教法といふものはその儘になつて居つては人生に現はれたとは言はれない。例へば薬が出来上つて居るやうなものであつて、その薬はたゞ薬の工場で拵へられて居たり、薬屋の店先に飾つて置かれた丈では薬の目的は達せられない。病があつた時にその病に應じてその薬が働いてそれを治すといふ處に初めて薬が薬としての目的を果す譯であります。それ故に佛の生きて居られる第一の教法といふ薬は、吾々今日心の中に様々の病を持つてそれに悩まされて居る、而もそれをさうだと知らずにゐたり、知つてゐても始終それを忘れて、この苦しみの因は他の罪であるやうに考へて居る、さういふやうな間違つた考へに對して、悟の智慧であるところの佛の光が吾々の心を照して、その間違ひをはつきり認めさしてくれる。吾々はそこに自分の間違ひを反省し、慚愧して、自分の生活を改善し又は整理をやつて行く。それが即ち教が實現せら

れ、實踐せられた處で佛が直ちに吾々に表れて下されたところである。又は自分の生活の上に様々の恵みがあるといふことをよく認めて、それに心からの感謝を捧げて行く。茲にも同様の實踐があり佛の實現があるのである。昔から今日に至るまで、信仰を有する者は皆、信仰の無い者の解らないところの世の中の深い味を味解して、その歡びの上から自分の生活を生活して行つて居るのであります。辛抱の出来ないところを辛抱して行く、誰にも慙へることの出来ないやうな悩みを、自分の心の奥底で佛と共に語り佛と共に喜び、其の苦しみの中から人に解らない味ひを見出して行く、さう云ふことがこの道即ち實踐であります。我々が佛の教法を實踐する時に、本當に佛がそこに生きて働いてゐる。だから概念の上では、十萬億の國々を隔てた世界に佛が居られるやうにも現はされて居るが、實踐の上へ來ると、所謂佛はこゝを去ること遠からずで、いつ

も我と共に起き、共に喜び、共に惱んで居られる。所謂朝な夕な佛ととも起き、夕な夕な佛ととも臥すといふのであります。

佛を
見る者
第三は「それ故に、私の肉身を見るものが私を見るのではない

らずつと自然に出て來る言葉であります。我々は自分等の間に於ても、親といひ子といひ、兄弟夫婦といつても、動もすればその肉身だけを見て心を見ることを忘れることがある。これはお互に深く反省すべきである。この眞實の相を發見するといふことは容易なことではない。やはり吾々は肉身や慾情や利害關係の間に相手をはいめてをいて、常に間違つた判断を下して行かうとして居るのである。佛もやはりその通りであつて、佛の肉體肉身を見るのは佛を見るのではない、佛の教を正しく知るものが佛を見るのである。

然るに世間では「佛を見る」といふことはこの眼で輝かしい御姿を見るのだと思ひ込んで、様々の行を修めて、一種の幻影のやうなものを見ようとあせつてゐる人々もあるが、それは大きな間違ひで、全く佛を感覚的に握らうとするのであります。佛を見るとは眼になぞらへた喩へで、いふまでもなく心で見ること、即ち教へを信じて、前々講に申しました自らを燈とすることである。燈の如く佛の光が吾々の心の中に輝いて居る、それが即ち佛を見、佛を知るものである。

今日の題は「佛のありか」であるが、詳しくは「佛とその所在」について大體お話しした次第であります。

第五講 佛の大慈悲

「佛の大慈悲は人によつて起り、この大悲に觸れて信する心が生れ、信する心によつて悟りが得られる。子によつて母となり、母の情に觸れて子の心が安らかさを得るのに等しい。」（同上「三二頁」）

例によつて此の本文の段を切ると「佛の大慈悲は人によつて起り」から「悟りが得られる」まで、この本文の主なるものである。而して「子に依つて母となり」からはりまでが譬であります。

大悲發生の動機

この本文は全體に於て、見出しの如く佛の大慈悲を表したのであるが、細かに言へば、佛の大慈悲の發生の動機を説いて居るのである。發生の動機といふのは、慈悲がどういふ動機で起つたか、如何なる理由によつて起つたか。換言すれば、佛は如何にして出現せられたのであるか、佛の意義はどういふものであるかといふことを述べてあるのであります。

所がこの文章によると、佛の大慈悲は、吾々人間によつて起ると書いてあるから、吾々人間が佛を起さしめる動機となつて居るといふ。その譬が「子供によつて母となる」である。通常の考へから言へば、母親が子供を産む、子供は母親によつて生れるのであるが、併し母の出現、母の意味から考へて來ると、子供によつて始めて母となる、子供がなければ、母とはいはれないのである。随つて母親の存在は子供の存在を必要條件として居る。この譬がこの本文を非

常に明瞭にして居るのであります。

子供は母によつて生れるが、母は子供を生むことによつて母たるの資格を得、又その子供は母の情に觸れてその安らかな心持になることが出来る。これを本文に當嵌めて見ると、佛の大慈悲は吾々の人間の存在が必要條件であつて、我々を離れては佛は成立し得ないのである。處で吾々は、丁度子供が母によつて安らかさを得るやうに、佛の大慈悲に觸れて、この佛を信する心が生れるのである。佛の大慈悲は、もう一つ外の譬で申せば、春の陽の暖かきのやうなものであつて、この陽春の暖かきによつて様々の美しい花が咲き出づる、暖かきがなければ花は咲くことが出来ない。この咲きいでた花から遂に立派な悟りの木の實が結ぶ。それと同じやうに信する心によつて悟りが得られる。信は必ず吾々を悟りに導くものである。

人間愛
の任務

この本文は、大體の意味に於ては、斯くの如く極めて簡單明瞭であるが、併し之を實際の上に味つて來ると、却々容易ではない。

佛の大悲は何故に起つて來たかと云はれても、それはどうも、さうであるからさうだ、といふより外はない。何故に母の慈悲が起つたかと云へば、それは子供を自分が生んだ、その生んだ子供を愛するといふこと、それだけの事實である。子供が母を信ずることが出来なければ安らかさを得ることは出来ない。子供が他人の處へ行かずして母の懷に縋るのは、母の愛が先立つて子供に降りかゝつて居るから、その母の愛に引かれて頑是ない子供も母の胸に縋るのである。これは吾々日常見て居る事實であつて、この事實を否定することは出来ない。併しさういふやうな譬を以て直に佛の存在を理窟で證明するといふのでは無論ない。吾々實際日常經驗して居る實例から、遡つて吾々は佛に觸れる。

その方法より途が無いのであります。

佛は屢經典の中に、この世界は皆自分のものである、その中に生きて居る生物は皆自分の子供であるといふことを説かれてあります。人間の愛は屢誤られるが、現實の愛の中では親子の愛は最も純粹である。子供は頑是ない時はその愛に觸れて唯無自覺に母の懷に寄るが、追々年を取つて來ると本當に親の愛を自覺し認めることは却々難かしい。併し又一方から考へると、この世に於て親の愛を十分に受けて居る人は、實際上、最早肉體の親でなしに、本當に心の親である處の永遠なる佛に觸れることの出来る用意が出来上つて居ると申してよいと思ひます。

自分のことを申してはどうかと思ふが、丁度今から三十七年前に、私は父に別れたのであるが、その病床に侍して居る時に、平生は何とも思はなかつた

が、愈病革まり臨終に迫つた時に、しみじみと父が一代の間自分の爲に苦勞をして呉れられたその愛を感せずには居られなかつた。三角形の底邊に並行して線を引くと無数の三角形が出来るが、頂角に近づくに従つて三角形の形は小さくなるが中味はやはり同じ値打のある三角形である。現實に於ける親の愛は大きな大きな愛の三角形の頂點であつて、よしそれが小さくとも吾々に最も近く觸れて來て居るのが此の親の愛であるといふやうなことをしみじみと感じたのであります。親の愛を無限に擴大すれば大きな大きな佛の愛に觸れるといふことも言はれる。それを逆に申せば、大きな佛の愛が其の尖端を親の愛に表して吾々に働きかけて居るといふことも感せられるのである。

實 在
の 聲

支那の古い言葉に「伏雞狸を撲ち、乳犬虎を喰む」といふことがある。伏雞といふのは卵を温めて居る親雞である。親雞が卵を温

める時には、狸が來ても狸を撲つ、乳犬虎を喰む、子供を養つて居る犬は虎にも喰付くやうな勢であるといふのである。是は無論生物に於ける親の愛の烈しい一例であるが、これから推して考へれば、本當に小さな生き物でも親は子供の爲に如何なる危険をも冒して保護して行く。之を物質的に取ればやくざなことになるが、精神の世界、靈の方面から之を考へて迫れば、何か知らん、大きな愛が小さく微塵に分れて、この吾々の周圍に來つて吾々を惠み温めて呉れて居るやうに感せられるのであります。よく經典の中に、佛は微塵の中にも満ち給ふといはれてあるが、天上の月は大海にも宿れば葉末の露にも宿る。實在の世界が、不完全なこの現實に向つて脈々として、あだかも海の波が渚に寄せかけて居るやうに、常に迫つて來て居るのではないか。昔からよく釋迦の往來八千返と云はれるのはこの趣を物語るのだと思はれる。佛はつね

にやるせない愛から止むに止まれず、極めて自然に吾々の所へいつも、往來して自覺を促してをられる。欲望の覆ひに妨げられて平生は誰しもこの喚び聲を聞かないのであるが、一度心を沈めて見れば必ずその御聲が聞えるに相違ない。それは細いやうで強い、幽かのやうで鋭い、遂にこの心を貫かすばをかぬ。この聲なき聲に耳を傾けるといふことが教養せられた人間の、最後の所でなからうか。吾々が日頃何とも思はずに居るやうな處に大きな祕密が潜んで居る。眼を注げば大きな寶を掘出す處の鍵が到る處にころがつて居るのである。

幸福

昔から信ある人が一つの米粒に對しても勿體ない、粗末にしてはならぬといひ、一ぱいの水も佛法の御用物であると非常に敬虔な態度で頭を下げて飲む、かういふ處に人間の幸福を開顯して行く本當の鍵があるのでないか。實在の世界からは既に吾々に向つて大きな愛を以て働きかけて

居る、光を以てこの闇を照さうとして居る、それに觸れて行く時に信する心が生れる。その信する心が吾々を證りに導いて呉れる。信は正しいものを認める智慧である、正しい認識である。即ち物の本當の値打を知る處の働きの信である。自分の値打を發見し、自分の周圍のあらゆるもの、値打を發見する、そこに吾々が平生何とも思はないでおろそかにして居つたものが、みんな一々大きな光を放つて來るのである。

二千五百年前に大聖世尊が御誕生の時、一道の光が流れて暗い處を照すと、そこに居る澤山の生き物が各自らを見、周圍を見てどうして一時にこんな澤山の人がこの世に生れたのであらうといつて驚いたといふ、素晴らしい文章が殘されて居る。佛の光、佛の慈悲によつて吾々の心が開けて來ると、自分の周圍が非常に賑やかになつて來る。さうして實に恐ろしい大きな價値のあるもの、

尊いものが吾々を包んで居ることが解る。この境地に宗教の形でなしでも入つて居る人が澤山あると思ふ。藝術家を始めとして多くの恵まれたる天分の持主は、皆その秘密に觸れて居るのだ。これは必ずしも學問の力を要しない、必ずしも多くの研究を要しない、唯信仰の内容であるところの敬虔な態度・敬虔な思ひが、吾々をさういふ幸福の世界に魅らせて呉れるのである。

雲の藝術性

自然に對する一つの興味ある話を申しませう。數年前であつたか、某畫家が東京の上野で一朶の白雲を見て「あゝ好い雲だなア」と思ふたが、その日はそれ丈で済んだが、その後帝展の出品に着手することになつて計らずもその雲が憶ひ出され、どうしてもその雲をもう一度見なければ筆が取れないことになつて、毎日々々上野へいつて空を仰ぎつゝ空を眺めてゐたが同じ雲が出て來ない。遂に空を仰ぎつゝ東海道を歩き出して、京都まで來

て仕舞つた。そして或日京都の岡崎公園とかで初めて同じ雲を發見して跳び上る程に喜び早速それをスケッチして東京に歸り、製作に従事し、その秋の展覽會には非常な好評を博したとのことである。同じ形の雲を二遍見ようと止むに止まれず願うたことも面白いし、又同じ雲を發見したことも興味深い。この藝術家なしには、その雲は浮びいでゝやがては消え去つて仕舞ふ外はない果敢ない運命を荷うてゐるものであるが、この人の爲めに地上に美しい姿を止めた。ほんとうに人間の不可思議性であり、同時に實在の不可思議性である。眼を注げば、かうした隠されたる價值は何處にもころがつてゐる筈である。私を知つてゐる某藝術家も「今こそ、私は一輪の花の前に心から愛と尊敬をもつて跪くことが出來ます」と涙ぐみながら申しました「何んといふ美しい、何といふ神々しいこととせう。しみじみ眺めてゐる。身體にも心にもその美が泌み

込むやうに感せられる」ともいつた。その人は又いふ「夜の空は、これまで梨地の盆のやうにしか見えなかつたが、今はその深淵が迫るやうに覺えます。吾々はその神祕の領域に棲んでゐるのだと不思議に感じる」ともいつた。實在の正しい姿に眼覺めた叫びと思ひます。是はこの人の賢さでもなければ、創作でもない。只その實在が準備せられた心に働きかけたからである。磨いた鏡でなければものゝ姿は映らぬ。この人達は皆美を觀るに準備せられた心の持主であつた。それ故に時が來ると、かうした天地の無絃の琴線に觸れうるのである。

ふくよかな心

これは見立つて解り易い藝術家の境地を申したのであるが、吾々の日常生活の上でも是と少しも變りがないと思ひます。吾々の心の覆ひを除き、曇りをとり、錆を拂ふ、み光りはいつも／＼吾々を訪れつゝある。吾々は氣がつくと同時に、是迄の態度を捨て、靜かな敬虔な態度で周圍

に接すべきであると思ひます。世尊の降誕によつて一道の光りが暗を破つて、多くの人々を照し出して、各自に見せしめたといふことは、味うても／＼味ひ切れぬものがある。この光りは照す光りと／＼もに濶い愛の光りである。この光りによつて冷たい心が温かくなり、ふくよかにして頂く。それは子が母の慈け一つで育つと同じである。私にもし「お前は佛を信することによつて、どんな效能があつた」と問ふ人があるならば私は直に「いつも心をふくよかにして頂いた」と答へる。私は之で救はれ來たと感じてゐるのであります。

この本文は幾度讀みましても、味の深い文章だと思ひます。

第六講 佛の四大願

佛は、その修行の初めに、四つの大誓願を起された。一つには、誓つてすべての人々を救はう。二つには、誓つてすべての煩惱を断たう。三つには、誓つてすべての教を學ばう。四つには、誓つてこのうへない悟りを得よう。(同上、三四頁)

これは昔から菩薩の四弘誓願と謂はれて居る。「弘」はまた「大」の意味であるから即ち四つの大きな誓といふ意味であります。

誓願の
意味

初めに、「佛はその修行の初めに」とあるから、佛の修行の初めはいふまでもなく菩薩である。菩薩といふことは、今日非常に一般化されて居るが、この本文の意味は、目の覺めた人といふことであつて、佛の教へに目を覺して道を求める人が菩薩である。或は求道者といつてもよい又修道者といつてもよいのである。すべて佛の教に目を覺して向上の一路、即ち理想に向つて進んで行くといふのが菩薩であるから、四つの大きな願は、これ佛の魂であると共に、我々佛の教によつて眼を覺して進んでゆく者の本當の精神である。そこで、先づ最初に、この誓願といふものに就いて御話をしたいと思ふのであります。

經典の中には、佛の誓がいろ／＼に説かれてあつて、『大無量壽經』の法藏菩薩の四十八願は餘りに有名であるが、それが異譯によると二十四願となり三十

六願ともなつてをり、或は薬師の十二大願とか勝鬘夫人の十大願とか、その他色々説かれてある。これらすべての本願を概括的に纏めてみると、皆四つの本願に收まつてしまふ。願は誓であり願ひである。ここに佛の精神を最も強く打ち出してあるといつてもよい。通常、佛の御心は智慧と慈悲との二つで現はされて居つて、經典の至るところにそれが説かれてある。智慧が今日の所謂理性に當るとすれば、慈悲は感情に當り、誓願は謂はゞ意志に相當すべきであらう。つまり佛の智慧と慈悲との心が一定の方向に向つて専注せられて強く現はされた時に、この誓願となるのであります。親が子供を育てる時に、子供に對する育て方其の他色々の知識を要する。無論、子供を愛するといふ慈悲がなければならぬことは申すまでもない。併しこの親の智慧と慈悲とが本當に子供に向つて注がれる時、どうしても一つの誓、願、本願、誓願となつて現はれて來

るのは極めて自然であつて、即ちどうしても此子を立派なものに育てあげねばをかぬといふ誓になるのであります。

願と人格

それであるから、手近く之を吾々の方に味つてみると、人間の人格の内容、その人柄と云ふやうなことは色々の調べ方があらうが

最も手つ取り早く分るのはその人の願を聞くことである。「あなたはどうかいふことを致したいのでございますか」といつて尋ねれば、その人の返答がその人の人格を現はして來る譯である。唯、物を食べた、といふ人もあらう、着物が欲しいといふ人もあらう、或は愛情が欲しいといふ人もあらう、乃至大きな事業を完成したいとか、或は周圍を改造して行かうとか、國家、社會、人類の爲に本當によいことをやつて行かうといふやうな風に、その人の願が、そのまゝその人の人格を現はして來る譯であります。佛の四つの大きな願は、吾々人

間の爲さなければならぬ、誓はなければならぬ最高完全の形式を表したものであると考へてよいと思ふのである。

自利と
利他

第一に、「一つには、誓つてすべての人々を救はう」とある。第二第三及び第四は、自己を完成して行かうといふ誓、即ち自利であり、第一は他人を完成して行かうといふ即ち利他の誓である。昔から之を菩薩の自利、利他と云ひ或は之を二利双行とも謂ふ。自分を本當に完成するといふことは、どうしても他人を完成するといふことではなければならぬ。随つて第二第三、第四の自己を完成するといふことは、取りも直さず第一の目的を果さんが爲めである。第一の目的は、皆をよいやうにして上げたいといふ、大きな又最も耀かしい尊い願である。併し此の尊い耀かしい願を果すにはやはり自分を完成して行かなければ出来ない。水に溺れようとする人を救ふには、先づ第一

に自分が水泳ぎを知つて居なければならぬ。自分が水泳ぎに熟達して居らずに、水の中へ飛び込めば他人と共に溺れて死ぬ外はない。これは賭易い道理である。けれども往々にしてそゝつかしい人道主義者達は自己を完成することを忘れて、徒に他の爲といつてやり出す。故に自分も困り相手も困る。その動機は誠に純真であるけれども、やつた結果は全く別の處へ船が着いてしまふ。かやうな悲喜劇が今日頻々として社會に繰返されてゐる。

吾々は、この四つの誓願を唯昔の物語とか或は世の中からかけ離れた何か空想のやうなものであると思つてはならない。近く之を吾々に引寄せて、本當に味はつてみたいと思ふのである。

世尊の
人間觀

第一のことは今言つたやうに、すべて自分のやることを皆他の爲に捧げようといふのである。自分のやることをすべて他の爲に捧

げようといふ大きな志願を満たす爲には、どうしても第二の「誓つてすべての煩惱を断たうといふことが必要である。煩惱は、極めて手つ取早く言へば、吾々の心の垢である。人間は何かをしたいと思つても、いつの間にもやら自分の純真な心を汚したり打壊したりするものが、自分の心の中から出て来る。よいことをやらうとする底から、その事をみんなつき崩す心が起る。謙遜にならうとするといつの間にもやら卑屈になる。自重をして行かうとすると何時の間にもやら高慢になる。正しい道を行はうとして自分を正しくして居るうちに何時の間にもやら他人を裁くことにかゝる。かういふやうな嘆きは一層反省する時に誰にでも知られるものである。だから吾々はよいことをする時に何より先に、吾々の心の上に起つてくる色々の間違ひや、妨げを反省して行かなければならぬ。この心の上の様々の妨げを煩惱と一言に云つて居るのである。煩惱は又他の言葉

で蓋或は覆ふとも云はれてゐる。これらは皆純真な吾々の心をふさいで居るからである。この蓋を取り、幕を切つて落せば、美しい耀かしい光景が出て來るといふことが、釋尊の吾々人間に對して抱いて居られた信念である。如何なる人も最初は間違つては居るが、その間違を直すと、中から立派なものが出て來る、大地を掘れば水に會ひ、壁を穿てば光に向ふ、是が世尊の人間に對する信念であります。

眞の
若返り法

第三は「誓つてすべての教へを學ぼう、これは實に大事なことであつた。頭を垂れて謙虚に道を學んで行かう、この考へこそは唯一の若返り法である。『華嚴經』入法界品に説かれてある善財童子は永へに青年の姿で現はされてあるが、彼は長い間色々様々の人に道を尋ねた。大和國の文珠院に名高い國

寶になつて居る像があるが、それは若々しい青年が實に朗かな態度で道を求めて行く。あれが人間の純真に進んで居る姿だと思ふ。道を求めてどこまでも進んで行くといふ人には年が行かぬ。純真なる若い青春の心がいつも躍つて居るのである。法を喜び法を慕うて、一生涯敬虔な態度で聞法し、道を求めて行きたい、大聖世尊は本當にそれを実行して行かれた方である。弟子達は、その意味を知らないで、只口に覺えて居るだけの法の言葉にさへ世尊は頭を垂れて、敬虔な態度で傾聴せられたといふ有名な話がある。

悟りの
實際味

「四つには誓つてこの上ない悟りを得よう」。是は人間最高の理想を體得して行かういふ願であつて、實に容易ならぬことであるが併しこの理想といふものは人間の心の奥底に誰も持つて居るものである。唯多くは平生かういふ大きな理想といふものは忘れて、何時でも目の前のことには

かりかゝり果てゝ居る。併し一朝何か事が起り、不幸災難にでも遭遇して、第二の煩惱が拂はれる時に、何時もその純真なる相を心に現はして來るのである。よく子供を失つた親から聞くことであるが、「頼りにして居つた自分の子供を失つて見ると自分の愚かさが解る、自分は子供の前途を見届けることの出来ない癖に、色々と子供の前途の事を考へたり心配したりして居つた。然るにそれが根こそぎされることを全く知らないその愚かさが實に身に泌みて解つた。ほんとうに自分は人生に對して根本的に愚である癖に、而も何時も賢さうに傲慢な態度を執つて居つたことが恥かしい」といふことをよく聞かされるのであるが、「誓つてこの上ない悟りを得よう」といふ積極的に表された菩薩の大志願、佛の大誓願は、手近く吾々人間の上に現はされて來る時にかういふ形を取つて現はれて來ることが多いと思ふ。道を求めてどこまでも専門的に山の中へ入つ

て修行をするといふやうな形でなしに、人生生活の上に色々の躓きや、失敗やを繰返すと、それが却つて動機になつて、上述の如くに宗教的反省の形を執るのである。所謂、第二の、誓つてすべての煩惱を断たう、といふ積極的な願が、宗教的實踐の上では寧ろ消極的の姿を執つて、上に申したやうに様々な事柄にかぶつたり躓いたりして、それが自ら反省の因になり、自分の至らなかつたことを心から懺悔し、心から頭を下げて過ちを過ちと認めるやうになり、そしてそこに第四の悟りの光が自ら吾々の心に耀いて來るのであります。

理想と反省

かう云ふ風に味はつて來ると、この佛の四大願は現下の世界に於いて、最も吾々學んで行かなければならぬことである。實に今日は社會的、個人的に様々な大きな病があるが、其根本はと云へば、かくの如き高遠なる理想と深刻なる自己反省を缺いて、唯自分の眼の前の欲望に無批判に

喰ひ附かうとすることから起るのだと思ふ。更に一步進んで、世の爲人の爲に一身を犠牲にするやうな壯烈な行ひの中にさへも、宗教的反省を加ふれば、その立派に見ゆる心さへ、實は自己の見透しがつかないことから起つてゐる事に驚かざるを得ないのである。此意味に於いて佛の此四大願はこの病に對する適切な薬であると考へられるのであります。

第七講 我に語る

「私の心よ、汝は何故に無益な境界に遊んで、少しの落着もなく、そはくとして静かでないのか。何故に私を惑はして、いたづらに物を集めさせるのか。心よ、汝は私を王者として生れさせたこともあるが、また貧しいものと生れさせて、あちこちに食を乞はせたこともある。私はこれまで、汝に乖くことはなかつたが、今度は、私も佛の教へを聞くことゝなつた。」

(同上「二〇頁」)

獨語する者

是は經典の中でも珍らしい表し方で、或る道を求めた人の獨語の形式を採つてある。自分自身に物語つて、「私の心よ」と呼び掛けて居る大層懐かしい、引締つた、讀む人の心にひたくと迫つて來るやうな文章である。始終他人を相手にし、社會を相手にし、常に周圍を相手にしてのみ吾々の心は驅廻つて居るのであるが、吾々は本當に一週間に一度でも、一回に一度でも、しんみりと自分の心と會話をするやうな人物になりたいものだと思ふ。深夜、ひつそりと邊が静まつて、自分の心に親しく對面して話を續ける、斯ういふやうな境地が人間に恵まれた最高の世界、最深の境地ではないかと思ひます。

一蓮院秀存といふ近代に於ける眞宗の碩學の日記を後の人が調べて見た時、その一節に、「存よ、よう聞いてくれ、存よ。」と書いてあつた。これは何のこ

とかと云ふと矢張り自分に呼掛けた、存と云ふのは秀存の存で、自分に呼掛けた言葉である。存よ、存よ、よく聞いてくれ、自分の心が教に合はないから、その教を能く聞いてくれ、と云つて自分の心に頼んだのである。すべて斯の道を修め、精神を修養し、宗教的な反省をする人は、すべて自分の心にかやうに呼掛けて居るのである。

呼ぶ者
呼ばれる者

この呼掛けるものと、呼掛けられるものと、自分の心の中に二つの存在があつて、呼ぶものも呼ばれるものも、如何にも親しいものが親しいものに、しんみりと呼掛けて頼んで居る心持がよく現はれて居る。たとひこれが迷と云はれても、不合理と云はれても、どうしても自分と切離すことの出来ないのが自分の心である。その切離しにくい所を教の力によつて敵かなければならない、鍛へなければならぬ、直さなければならぬ。その心の

道程を物語つて居るのが此の一段である。第三講の處に、「心に従はず、心の主となれ」と云ふ文章があつた。この對話を見ると、間違つた自分の心の誘惑に負けないで、この人が自分の心の主になつたことを、はつきりと現はして居るのである。これ等のことを意識すると否とに係はらず、實際斯う云ふ風に心掛けて居るこの人は、確かに心の主となり、教を燈とした人である。その教が自分の心の中に食込んで来て、何時のまにやら吾々の平生考へて居る常識の立場を覆へして、今度は教がその主人の位置に坐り込み、教が燈になつて来た。さうして自分の心を自ら耀かして、他に對して呼掛けるよりも先づ自分の心に呼掛けて居る。教を燈とせよ、己れ自らを燈とせよ、と云はれたが、今はその教が自分の燈となつた。教とこの自分が一つになつた。斯うした味ひが宗教の非常に深い境地であつて、昔から「煩惱即菩提」で、吾々の色々間違

つた心こころがそのまゝ悟さとりの智慧ちゐであると謂いはれ、或あるは「生死しじ即すなはち涅槃ねはん、迷まよひがそのまゝ涅槃ねはんの悟さとりであると謂いはれる處ところである。これは決して教けう理りを述のべたり理り窟くつを申まをしたりして居ゐるのではない、自じ分ぶんの心こころの中なかに起おこつた本ほん當たうの體たい驗げん・換か言げんすれば信しん仰かうの姿すがたと云いふか、或あるは正ただしい生せい活くわつの本ほん當たうの秘ひ密みつの處ところを打うち出だして居ゐるのである。人じん間げんの様さま々くなる生せい活くわつ、社しゃ會かいに現あらはれたる色いろ々くの事じ件けん、段だん々くと本もとを究まめて見みると所しよ詮せんは自じ分ぶんの心こころの葛かつ藤とうに過すぎないことがわかる。その心こころの葛かつ藤とうに喰くひ込こんで自じ分ぶんの間ま違ちがへた心こころに呼よび掛かけて居ゐる、洵まことに尊たうい懐わづかしい文章ぶんぎでありま

此この文ぶん章ぎやうも大だい體たい四しつに分わかれてゐる。第だい一だいいち段だんは「私わたくしの心こころよ、汝なをは何なに故ゆゑに無む益えきな境きやう界がいに遊あそんで、少すこしの落おち着つきもなく、そはくとして静しづかでないのか」。第だい二だいに段だんは、「何なに故ゆゑに私わたくしを惑まどはして、いたづらに物ものを集あつめさせるのか」。第だい三だいに段だんは「心こころ

よ。汝なをは私わたくしを王わう者じやとして云うん々く」から後のちが第だい四だいに段だん目めである。

徒ただに集あつめる者もの

此この初はじめの一だん段だんに於おいて、汝なをは何なに故ゆゑに無む益えきな境きやう界がいに遊あそんでそはくとしてゐるのか、しんみりと落おち着つきいたことはないぢやないか、と云いふことゝ、第だい二だいに段だん目めの「私わたくしを惑まどはして、物ものを集あつめさせるのか」と云いふことゝは裏うらと表あはれになつて居ゐつて、第だい一だいいちは第だい二だいにから來きて居ゐると言いつてもよいのである。「いたづらに物ものを集あつめる」と云いふ心こころ、なんでも物ものを集あつめさへすればよい、唯ただ慾よくが深ふかうて、なんでも自じ分ぶんの處ところへ持もつて來こよう、感かん覺かく的てきに陶たう醉すいして樂たのしまう、心こころの深ふかい奥おく底そこから來きたのでなくて、唯ただ端はたの刺し戟げきに應おうじて動どう物ぶつ的てきに駈かけ廻まはつて居ゐるのが大だい體たい吾われ々く現げん實じつの相あひである。さう云いふものから深ふかく沈しづんで自じ分ぶんの心こころに專せん注ちゆするやうになつて來こる、それが教せが心こころに入はいつて來きた姿すがたである。「何なに故ゆゑに私わたくしを惑まどはして、いたづらに物ものを集あつめさせるのか」、これが此この文ぶん章ぎやうの中なかで最も重ちゆう要やうな點てんで

ある。若し物を集めるのがよければ、楽器を澤山集めたら音楽家になれる、さうすれば楽器屋の主人が世界の大家音楽家になる譯だが、楽器を幾ら集めても音は出て来ない。吾々は欲に騙されて、何でも澤山集めてくれば自分の生活がよくなつたやうに考へて居るが、それは唯嵩が増大したわけで、楽器を澤山集めたわけで、そこから音楽は出て来ないと同じである。澤山の楽器を集めなくとも、一つの楽器に専心して、如何にこれから音を出さうか、と云ふことを考へて修練をつめば、一つの楽器が自らを樂しませ、又周囲を樂しませる。

琴に命令する王様

昔印度の王様が琴の妙音を聞かれて、直ぐに琴を持つて来いと言はれ、家來の者が王様の處へ琴を持つて来た。王様は「琴よ、お前音を出せ」と言つて命令された、けれども琴は沈黙して居つた。幾度も幾度も命令を出されたが琴は頑強に沈黙を守つて居つた。王様は忿つて足を擧げて

琴を蹴られた。けれども琴は最後迄沈黙を守りつけざるを得なかつた。そしてそこにバラ／＼に毀された哀しい琴の残骸が横たはつた。一人の家來が「幾らお腹立ち遊ばして御折檻なされても、琴は良い音は出させぬ。やはり良い音を出すには上手な人に弾かせなければなりません」と申上げた、と云ふことが或るお經に書いてあります。

眞の所有者

吾々は動もすれば、否、恐らく人間全體の生活は、愛情の問題を取扱ふにも、金の問題を取扱ふにも、すべて斯う云ふ間違つたことを、お互ひに知らずにやつて居るのであるまいか。細かな準備と正しい方法を忘れて、性急に目的を果さうとする。結果は自他ともに打ちこはしに終る丈である。そしてたゞ一概に分量を餘計集めて来れば満足が得られると誤認して一生涯唯物を集めることに汲々として、終に物の本當の内容を知ることが出来

ない。樂器を集めて而も一生涯樂の音を出すと云ふことも知らないし聞くことも知らない。吾々は自分が音樂をやることが出来なければ耳を練習すればよろしい、耳を練習すれば世界の音樂がみな自分のものになる。耳をほつたらかしてをいて、唯いたづらに樂器を集めたり、レコードを集めたりして、そこに音樂があるやうに考へて居る。現代のやうな、あちらからもこちらからも八方から刺戟の強い感覺的な感じの多い時に於ては、斯う云ふことは特に國民的に大いに反省して行くべきものだと思ふ。さう云ふ意味に於て此の一文は非常な深い示唆と大きな警告を吾々に與へて居ると思ふ。この文章は自分一人靜かな處で自分自らに呼びかけた私語である。併しこの私語は、屋上で呼ぶが如く、ラヂオの放送の如く、萬人の心の奥底に通じて、何か知ら強くみんなの琴線に響いて來るやうに思ふのであります。

富める
貧者

第三段は、「汝は私を王者として生れさせたこともあるが、また貧しいものとして生れさせて、あちこちに食を乞はせたこともある」と物語つて居るが、是は、佛教の所謂輪廻の長い歴史を云うたものに違ひない。併し又之を現實の吾々もそのまゝ受取ることが出来ると思ふ。吾々は自分等の恵まれた周圍を實の如く味はつたならば、今日吾々平凡なる一市民が、恐らく、五十年前百年前の如何なる王者にも、如何なる富豪にも負けないやうな生活をしてゐる筈である。日本だけで考へて見ても、恐らく日本の建國以來斯くの如く發達した周圍を有つた時代は一度もなかつたに違ひない。それ程恵まれて居るにも拘らず、みんな貧しい人の如く悲しんで居る、歎いて居る、足りない足らないと云つて苦しんで居る。是は決して日本だけの問題でなくて、今日は恐らく世界の問題になつて居ると思ふ。周圍を發達させ、周圍を開拓す

ると云ふことも、どこまでいつても限りのないものであるが、今日の状態でも
非常な進んだ程度となつてゐる。即ちこれまで世界を擧げて周圍の物質的な開
拓に懸命になつた結果、このレベルまでやり得たのであるが、夫にも係はらず
どれだけみんなが満足を得たか。集めたものは澤山あるけれども、食べると云
ふことを知らない。味ふべきことを知らない。その眼の前に置かれた樂器の音
を出すことを知らない。さうすればみんなが寄つてたかつて一生懸命にやつた
ことが、實際の處は何にも得られず、何にも味は、れずに、謂は、暗から暗へ
葬られてしまふ。王者に生れてと云ふ言葉王者の如く吾々は今日非常に恵まれ
た贅澤な生活をして居るが、それがみんな貧民の如く悲しんで居る。この點は

靈の勝利

お互ひに一つ反省して行きたいと思ふのであります。
最後に、「私はこれまで汝に乖くことはなかつたが、今度は私

も佛の教を聞くことゝなつた、」と言つて、是まで間違つた心について居つたそ
れに對して最後の絶縁状を送つて居るのである。詰り佛の心が人間の心に打
克ち、凡夫が佛に負け、佛の心が吾々の心に這入り込んだ處である。是までは
間違つたお前に騙されて、お前の言ふことを聞いたのであるが、今度は自分も
本當に眼覺めて、正しい歩みを運ぶやうになつた。是から先はお前に騙されぬ
やうに、寧ろお前をリードして行くのだ、決して徒にぶち壊すのではなく、
丁度荒馬をこなして名馬となすやうに、そのものを本質的によいものにしてや
らうとしかゝつてゐる。斯うなつて來ると、吾々の今まで間違つた生活全體が
その儘正しい位置に置かれて來る。今までは坐るべき場處に坐つて居なかつた
ものだから、事が皆ちぐはぐして來たのであるが、本當に坐るべき場處に坐つ
て居れば總てが皆順調に行くに違ひない。

かやうにして此一文は、「吾に語る」ところのしんみりした情味のあるものであるが、裏を返せば、輝かしい處の勝利の聲でもありません。教が實際に表れる時は、いつもこの一境を顯はしてくるのだと思ひます。

第八講 信のこゝろ

「信仰は、まことに人の善き伴であり、この世の旅路の糧であり、このうへない富である。また(何故かと云へば)佛の教へを受けて持つ手、あらゆる功德を受けとる清い手である。」(同上「三四三頁」)

此の本文も凡そ二つに分れて居つて、「信仰は、まことに、人の善き伴であり」から「このうへない富である」までが第一段、「また佛の教を受けて持つ手」から、をばりまでが第二段になる。此の本文の意味をはつきりさせる爲に、第

一段と第二段の繋ぎに當る「また」と云ふ言葉を「なせかといへば」といふ意味に解釋すると、非常にこの短い文章が立體的に深くなつて來るのである。前の一段は、信仰の功德をすつと述べたものである。然らばどうしてさういふ功德が得られるのかといふと、これは佛の教を受けて持つ手である。凡ての功德を受けとる清らかな手であるから、斯ういふ風に解釋した方が非常にびつたりと我々に來るやうに思ひます。

善 伴
き 侶

初めに、「信仰はまことに人の善き伴であり」と云うてあるが、大體この文章は非常に意味の深いところであつて、經典の中には、この信のこゝろ、信仰の味ひを説いたものが非常に澤山ある。佛の教の、世の中に現はれる實際の點になると、この信を説いてあるものが殆んど十中の八九であるといつて宜しいと思ふ。即ち、佛の教へが人間に現はれたところが信

仰である。その故にこの信といふ語は佛の心といふこと、随つて信のこゝろといふことは、佛の心が我々人間に現はれた、即ち佛の教が人生に現はれて來たところ、或は佛が我々に生きて働いて居るところである。又我々の方からいへば、佛の教を我がものにして、今までと變つた一つの人生の觀方を持ち、深い世の中のことになり、又今まで氣付かなかつた非常に大きな幸福に目が覺めるといふことである。だから、この信のこゝろといふことを除いては、佛教の實際的方面はなくなるといつていゝ位に非常に大事な部面であります。

そこで、「信のこゝろ」と「こゝろ」を態と假名で書いてをいたが、これは意味合といふやうな味ひであり精神といふ意味ではない。それで、この先刻申ましたやうに信仰といふのは佛の心であるから、それは、吾々の大事にして居る小さな俺・俺といふ自我の殻が破られてその中から出て來るのであります。

徹底的
の光明觀

私共の子供の時分によく大人から謎をかけられたことがあるが、それは「棘屋の隣りの皮屋の隣りの澁屋の隣りの甘い物屋は何か」といふのである。子供の時分に能く分らないで困らせられた経験があるが、考へて見れば栗をいつたのである。栗の棘を除き、皮を剥ぎ、更に澁を除くと中から甘い肉が出る。佛の心といふのは、吾々人間の上の方に覆はれて居る棘のやうなものを除り去り、本當の處を受取れずに外と内とを隔て、居る堅い皮を剥ぎ、更に澁い嫌なえげつない心の澁を除き去ると中から甘いものが出る。信仰の味ひが丁度それであつて、實際の上から自分の心の棘を除き、皮を除き、澁を除つてみると、その奥底から本當の喜びが湧いて来る、感謝も起つて来る、従來氣付かなかつた處に何ともいへぬ妙味があるといふことを發見する。さうすると、「あゝ、どうも自分程仕合せ者はない、幸福な者はない」といふや

うになる。これは何も朝から晩までさう思つて居る譯ではないが、反省をする時に必ず心の奥底から湧いて来るのである。さうした喜びは本當の人生の奥底から湧いて来る喜びであつて、その心持で世の中を眺めて見ると、周圍の如何なる人に對しても、その人達が目を覺まさずに、或は惡意を以て向つて来ることもあらうし、或は非常に間違つた處へ首を突つ込んで居る者もあらう、併しその間違ひさへ取除けば、やがてその心の奥底から美しい光が出て来るに違ひない、といふ人生全體に對する確信を持つのである。これは實に一つの決定的な美はしい人生觀である。他の言葉で言へば、人生最後の處に光を見附けるのであるから、かやうな人は本當にいゝ意味合に於ける徹底的樂天觀といふべきである。だからどういふことが起つて來ても、どういふ間違ひがあらうが、過ちがあらうが、その過ちや間違ひの奥底には必ずいゝものが隠れて居るに違ひ

ないといふ確信がある。その意味に於てその人の人生は光り耀いて居り。徹底的な光明主義である。かういふ態度に立つのが即ちこの信仰である。だから唯少し許り、金を出して神佛に願かけをして現世の小さな欲望を満たすとか、或は病氣を癒して貰ふとか、或はお札を貼つて不幸や災難を除くとか、通常民間で謂つて居るやうな功利的な利己的な所謂信心なるものは、茲に謂ふ處の本當の意味の信仰ではない。茲に所謂信念といふものは人間の心の中から徹底的に疑ひといふものを除くのである。さうして傲慢な心、高ぶる心を克服しその疑ひの棘を取去り、高ぶる皮を破つて、而してその中から出て来る甘い味ひが即ち本當の意味の信仰であります。

輝く
純情

吾々の心の状態は、常に疑や傲に隠されて、純真な心が現はれて来ない。童謡を研究して居る方の言を新聞で見たのであるが、

童謡とか民謡とかいふものは、誰でもみんなが心の奥底に有つて居るものである。故に誰でも純情な心持にさへなれば自ら歌ひ出されるものだ。處が多くの人は、何時の間にもやらの純情な心を様々の心な壁に閉ざされて、その爲に心が濁き、固くなつてしまつて、天地自然と一つになつて流れるといふやうな味ひを失つて仕舞つてゐる。夫故に皆が美しい歌を歌ふことが出来ないといふのである。今本當の信仰は、その童心、純情な心と連なつて居るのであつて、心の殻を破つた處に自ら湧いて来る一つの輝しい智慧であり、判断であり、ふくよかな情味であります。それであるから之を裏から申せば、信のない人は孤獨の人、本當に心の奥底から融け合ふことの出来ない人間である。感覺的には色々二つの心が一つになることもあらうが、それらは多く利害を本にした心の上皮の悪戯であつて、やがては壊れてゆくに違ひない。吾々が至上と考へて居

人間の愛情も亦終に腐つて行く外はないのだ。人間のやつて居ることはそれだけではもう夏の魚のやうに、慌だしく腐つてゆく外はない、といふことがこの佛教の徹底的な人生観である。だから吾々のすることは何をやつたからといつて、かういふ正しい信念に立たん限りに於ては、それはもう本當の價値のないものである。随つてさういふ人は孤獨の人であつて、本當に手を連ねて行く人を持たない人だといふのであります。

寂寥の
人生相

私は歐洲大戦中、ロンドンに居つて一年ばかりの間に、ドイツの飛行船に二十數夜襲はれた。一番始め飛行船がやつて来た時にはまだ防空の準備が出来なくて、しんとして静かなんだら雲が青い月の光を受けて居るその間からドイツの飛行船が襲來して、勝手氣儘にロンドンに爆弾を投じて行つた。人口七百五十萬の大都市が僅か一二隻の飛行船の爲に全く山

中の太古のやうにしんとして猫一匹出ぬ、みんな地下室へ入つて燈を暗くして、相願て話一つしなかつた。たつた二艘や三艘の飛行船が空に死の羽を伸ばしたわけで、七百五十萬人が沈黙をして、横に連なつて居る幾多の文化の設備が、すつかり絶えてしまひ、そこにたゞ一人の淋しい自分といふものを發見した。私は一生涯で、あれ位極めて單純な仕方によつて、人間自體が全く孤獨のものであるといふ感じを一度に味はつたことはあとにもさきにもない。

功德を
受ける手

併し靜かに考へればそれが本當の人間の相だと思ふ。信ある人はこの孤獨のドン底を通して人生全體を光り輝くものと見るのである。今日の覺めない人も何時かは目を覺まして皆んな手を取ることが出来るのだといふ確信があるから、信ある人にとつては一切を伴とすることが出来るのである。即ち「信仰はまことに人のよき伴である」といふべきである。この「伴」

といふのは伴侶といふ意味で、仲間といふやうな意味である。それからこの世における「旅路の糧」であるとは、心が飢えないことだ。飢ゑた時には必ず満たされる、淋しい時には必ず慰められる、困る時には必ず救はれる、それが信仰の徳であるから、「旅路の糧でありこのうへない富である」、世の中に如何に資産があるといつても、信仰位尊い資産はない。「又佛の教へを受けて持つ手」といふのはどうしてさういふやうな働きがあるかといふと、この佛の教へといふものは信仰によつてそれを受け持つのであるから、他の言葉でいへば、「あらゆる功德を受取る清い手」である。信の力によつてのみ、本當の善いものを受取る事が出来る、信は清い手であるから、何ものを受取つても汚れない。信のない者が受取るとみんなそれを汚してしまふ。本當の心の親切を受取るといふことは却々容易ならぬことである。人にものをやるといふことも容易ならぬ

ことであるが、人から本當にいゝものを受取るといふことは、これにも増して容易ならぬことである。信仰がなければ、すべて外から入つて来たものを皆汚して仕舞ふ。どんな酒でも毒の入つた盃、きたない盃で飲めばその立派な酒が皆汚れてしまふ。吾々自らもすべてのものを求めることや集めることや取ることばかり考へて居つて、それを受取る手のことを考へない。それであるから、大抵外界から入つて来たもの、即ち通常吾々の考へて居る幸福の因であるとか考へて居るものが、吾々の手に渡されると何時の間にか汚されてしまふ。富を持つて居る人でも、名を持つて居る人でも、學問のある人でも、すべて世の中から羨まれるやうなものを持つて居る人が、却つてうっかりして居ると、非常にその爲に自分の身を壊すといふことの起つて来るのは、これは外側から来るものが悪いのでない、受取る吾々の手が汚れてゐるからである。信仰

といふものは何時もく汚れる吾々の手を必ず清めてくれるのである。だから昔から信は清浄の義といはれて居るが、寧ろ實際の活動からいふと、信仰といふものは全く自動車に浄化装置が据着けられて居るやうなものであります。

莊嚴境

の獲得

昔、印度の王様が大きな宮殿を造り、二人の畫師に命じその内部の双方の壁に畫をかゝせた、半年の間に完成せよといふのである。

二人は一代の名譽と心得、この大きな創作にとりかゝつた。一人の畫師は一生懸命に勉強して、定めの日日に立派に描き上げたが、一人の畫師は何もかゝずに只一日中壁を磨くことにかゝつてゐた。一方の畫が出来上ると自分の受持ちも出来上つたといふ。王様が御覽になつてすばらしい出来榮えであると御賞めになつたが、一方の壁は又鏡のやうに磨かれた爲めに、すつくり其壁畫を映し取つて、却つて實物よりも美しく、所謂神韵漂渺たるものがある。王様は二度び

つくりして亦それをも御賞めになつたといふのである。信は磨かれた壁に喩ふべく、一切の功德利益は描かれた壁と云ふべきである。功德の寶の壁は既に完成してゐる。問題は清浄の信をうるか否かである。心に信を得ることを外にして寶を求めては、上述の如く毒の盃で毒酒を呑むやうなものである。此際吾々の執るべき方法は唯一つ、清浄なる信を得ることである。此信が得られる時に一切の功德、人生の大莊嚴は磨壁に映る壁畫の如く宛然として我有となるであらう。

第九講 婦人の教

「菴婆波利よ、女は心の亂れやすいもの、行ひの間違ひやすいものである。欲が深いから慳む心、嫉む心が強い。男に比べて、障りの多いものといはねばならぬ。菴婆波利よ、女の持つ強い誘惑である財と色とは、決して永久の寶ではない、たゞ悟りの道だけが、永へにこはれぬ寶である。」〔同上三〇三頁〕

釋尊の晩年に、毘舍離といふ市に菴婆波利と云ふ、今日の女優と昔の花魁を一つにしたやうな婦人があつて、澤山の婦女を養ひ、大きな邸宅と別莊を持つ

て全盛を極めて居つた。處がこの婦人が初めて釋尊に、お會ひした時に釋尊がお説きになつたのが、この一段の本文であるが、これは同時に婦人全體に關する教となつて居る譯であります。

此の文章も二段に分けて、「菴婆波利よ」から「男に比べて障りの多いものといはねばならぬ」までが一段、それからをわりまでを第二段といふ風に味つた方が解り易いやうである。

婦人の さてこの文章は佛教の婦人觀といふやうな固苦しいことになることとを避けて、このまゝ素直に受けとることが出来るのであるが、

婦人は「心が亂れやすい」、心が亂れやすいから随つて心から出て來て居るところの「行ひが間違ひやすい」。これは所謂道を修めるとか、修養するとか、反省するとかいふやうな佛の教を實踐する上の立場から眺めて、婦人の弱點一般を

いはれて居ると思ふ。

次に「欲が深いから慳吝心、嫉妬心が強い」、これは實に女性の中心、根本を衝いた一句である。どう云ふ譯で一體心が亂れ易いか、それは欲が深いから。欲が深いといふ日本語は、餘程一般化され過ぎて居つて、正しい言葉の意味は傳へにくいのでありますが、通常世間でいつて居るやうな意味よりも、もう少し根本的なものであつて、寧ろ「女性は愛を命として居る」、といった方が適當であらう。男子は事業や、名譽や、學問に没頭して、どちらからといへば、人生の形式的、抽象的の方面に首を突込む。之を船に譬へれば男子は磁石や船頭のやうなもので、これが若し方向を間違へば船は途方もない處に着くが、併し船頭や磁石は船の本質ではない。荷物を積込んでゐる船の本質、船そのものに付ては、女性が寧ろ之を代表して居ると申してよい。詰り女性は人生の本質で

ある處の愛情を其の命にして居る。男子が様々の事業や、名譽や、學問と云ふやうな指導の方面に携はる代りに、女性は人生の内容である「愛」を代表し、愛の中に没頭して進んで居る。それを指して欲が深いといはれる。女性は又愛を命として生活して居るから、随つて又深い悩みがある譯である。方向を定めるのは理性の方向であるが此の生活の本質は情意の方向である。

愛の賭事

随つて此の愛といふものは、謂はゞ全取全奪で、苟くも中間的存在を許さない。全く取り、全く奪ふと云ふことが愛の命であつて言ひ換へれば物を絶對的に占有しよう、根本的に自分のものにしよう、と云ふことに歸着する。だから丁度、男子が事業に就て色々と苦しむやうに、女性は愛情の問題に就て悩んで居る。全く乗るか背るかの大きな賭事をやつて居るやうなものである。而も此の愛と云ふものは、丁度世間で株の動搖があるやうに

始終動いて居る。其の動いて居る愛を常に押へて行かうと云つて、一生涯の間それにかゝりはてるのであるから、全く大きな冒険を毎日々々繰返して居るやうなものである。さう云ふ非常に變り易い、動搖し易いものゝ上に腰を掛けて居るから時々大きな破綻が来る。謂はゞ玉乗りをやつて居るやうなもので、うつかりするとすぐ覆へる。世間にその實例は乏しくない。「欲が深いから慳む心嫉む心が強い」その愛の對象は或は異性を愛するとか、或は子供を愛するとか或は家庭を愛するとか色々變るけれども、それを自分が根本に有つて行かう、寧ろ能動的に取ると云ふことよりも、與へられたものを何處までもしつかり把んで行かうと云ふやうな點が非常に強い。それを表して「慳む心、嫉む心が強い」と言はれるのである。一旦手に入れたものは離したくない、自分の存在を脅かすやうなものに對しては嫉む。女は男に比べて障りが多いといはれたもの

そのまゝ受取ればなんでもないことであるが、もう少し是は深く考へて行かなければならぬ。男性は抽象的な理窟が多くて、随つて片附け方が樂である。處が此の片附け方の樂だと云ふことは又出來上りが良くないといふことである。深く人生の根本へ突進んで居る愛を命とした女性は道を修めると云ふことにはちよつと考へると非常に困難なやうであるが、それは道德的困難であつて、宗教的には、又一種特別の世界が惠まれて居るのであります。

最 端 の 生 活 者

この菴婆波利と云ふ人は一生の間、人間の色戀の沙汰をば金に換算してやつて居たのであるから、人生といふものを愛情の一面から見出だすといふよりはそこを喰ひ抜けて來た人間である。「思案の外」といはれる調子の外れの色戀からこの世の中が動いて居る、その根本を押へて惱んで來た人であるから、謂はゞ人生の酸いも甘いも噛み分けた人である。さう云ふ

人に對して釋尊がお話をなされた時に、此の人は一轉して佛法に深く這入つて自分の持つて居つた別荘を總て皆此の教團に捧げたのであります。斯う云ふやうなことは道德的な行き方ではない。愛を命として常に一か八かの生活をして居る女性に取つては、宗教的轉化といふことが男性よりも非常に都合よく恵まれ、又深く這入り易いのである。恐らく統計を取つたら世界の宗教に於て、數からいつても、力からいつても、男性の方よりも女性の方が遙に多く又深く宗教に這入り又それを能く維持して居るだらうと思ふ。詰り女性は人間の最後の處へ打突つて居る。一體宗教といふものは人生の最後から第一歩を運ぶのであるから本當の教といふものは、單なる抽象的な教義を學ぶといふことになしに、この人間の生活の根本を見極めて、その最後の處を押へ、其處から正しい教の第一歩が始まるのである。之を例へて申せば、酒が麴から醱酵して出來上る

やうに人間生活の最後に一つの醱酵状態がある。平生は利害關係で固まつて居つて工合が悪いが、いよく最後の處へ行くと一種の醱酵状態がくる。其の時に平生の散文的な世界を超えて、やゝ危険ではあるが、一種の創作状態に入る。この境地に於て一つの全然新しいものが生れる。それが宗教的轉化の處であつて、最も健全なる宗教は存外量的には弘まらないやうであるが、本質的には、社會がどのやうにならうが、宗教が如何に衰へようが決して心配の要らない程の自然的な根強い持續力がある。眞實の教といふものは、無理に人が拵へたのでなくて、あるがまゝなる世界を見て其のまゝ表したものであるから、いつても人間が行詰つた最後に開けて來るものであります。屹度一度はみんながそこへ落込んで來るに違ひない。人生の酸いも甘いも噛み分けた最後はどうしてもそこへ行かなければならぬ。一階から二階に上つたらその上は三階に行くにき

まつて居る。さう云ふやうな境地に女性を始めから飛込んで居る。だから「頭を廻らせば姑蘇これ白雲」で頭を廻らした處に過去の一切の生活態が尊い美しいものに轉化されて仕舞ふ。男に比べて障りが多いといはれるのは、寧ろ逆にいへば、障りの多いこと夫自體が宗教的には非常に恵まれた世界に在ることを示して居るのであります。

女性の 次に「菴婆波利よ、女の持つ強い誘惑である財と色とは決して永

特異性

久の寶でない」、こゝは佛が根本的に自分の教を打出された處であ

る。婦人が持つて居る全財産といふか、世界に向つて戦ふ處の唯一の武器といふか、婦人が世界的存在の唯一の立場である處の「財」と「色」といふのは、決して永久の寶ではない。それを足場にして登らなければならないものがある。梯子といふものは二階へ上る迄の足場であつて、二階へ登り終れば梯子は棄て、

よい。梯子があれば、下りたり上つたり出来るが、梯子で生活するといふことはない。此の意味に於て女性が持つて居る唯一の武器、唯一の立場である處のその色と財といふものは要するに梯子段に過ぎない。それを力にし、これをつき詰めた處に出て来るものが宗教の世界信仰の天地であつて、此本文では「悟りの道」と云はれて居ります。

經典の各所に、婦人はまやかして捉へ處がない、性根の極らぬものだ、そして面は優しいが腹は吸血鬼のやうだなどと説かれてあるが、所詮は人生の軌範である道徳から云うたもので、愛に生きる婦人にとつてはそれは正しい批判であるといふはねばならぬ。併し云ふまでもなく是は決して男性と比べて女性を卑しめた言葉でない。裏を返せば女性の特異性を描いたもので、佛の慈愛から女性自らに向つて反省を促されたものである。愛は何ものをも奪うて憚らない。

女性は人生の最終を最初から歩いてゐる。従つて最初から爛れた處へ貼られる膏藥のやうに總てが直接の効果を示す部面である。是は女性自身が第一に自覺せねばならないが、男性も亦よく是を知らねばならぬ。

此の一段は文章の表は極めてすら／＼として居つて、このまゝ受取ればそれでよい。必ずしも面倒な理窟をいはなくとも、幾度も幾度もこの佛の教を讀んで居れば、その間に佛の精神が脈々として響いて來るのであります。併し私に今お話したやうに、深く此の教を伺つてみると、實に味ひが深いのであつて、障りが多いといはれたが、障りが多いといふことは徳が多いといふことである。氷が多いといふことは水が多いといふことである。丁度艱難辛苦して登つた山は、其の眺めも亦格別であるやうなものであります。

第十講 願ひが満される

「佛は盗みの罪を離れることを修め、その功德にて、人々の求めるものを得るやうにと願ひたまふ」(同上三四頁)

これはもつと長い文章であるが、前後を省いて、中の處を抜き出したものであります。この盗みを離れるといふことに付て、茲に吾々の實生活に關する三つの大きな問題をあげてあつて、詰り物の命を取る殺生、他人のものを取る盗み、それから淫らな行ひ、即ち昔から殺生、偷盜、邪淫といはれて居るもので

ある。この三つの中で、今は第二の盗みをあげて、前後の二つをこれへ攝めたのである。何故ならば物の命を取るといふことは、命を盗むこと即ち殺生であり、愛の盗みが淫らな行、即ち邪淫であるから、この二つはともに盗みの中に這入つて来る。故に便宜上この三つの中で第二の盗みをあげたのである。

盗みは
止まぬ

そこで佛は、吾々人間の日暮しの中で斯ういふやうな非常に大きな誤りを犯して居ることに付て到底人間の力ではやり得ないから佛が代つてその大きな問題を解決して下さる、といふのがこゝにあげた本文の大體の意味合であります。

處で、盗みの罪を離れることを佛が修行をせられて、その功徳を吾々に與へて下さるといふことは、これを裏からいふと、盗みを止めることは、人間の力では不可能であるといふことを表はして居る。勿論こゝに所謂盗みといふのは

必ずしも法律や道徳で申して居る所の盗みではなくして、もつと人間の生活の根本に觸れて居るものであります。

不相應
が盗み

大體この盗みといふことは經典の中では、人が與へないのを取るといふよりも、もう一つ宗教的な深い意味では、縦しや人が與へたものを取つても盗みとなると説かれて居る。それは自分に相應しからぬことをするの盗みであるといふ意である。自分に相應しからぬことゝ云ふのは、吾々がどうしてもやらなければならないことをやらずに居ることを意味する。他の言葉で申せば吾々が集めようとしたり、取らうとしたり、若しくは現に有つて居るものが自分と少しも相應して居らない。物と自分とがちぐはぐになつて居る。更に言ひ換へるとその物の有つて居る價值が本當に分らない。物の價值を本當

に知らずに使つて居るといふことは、ものそのものを殺して居ることであり、そのものを盗んで居ることである。だから吾々が幾ら物を集めて來ても本當にそれが自分ものになりきらぬ、その上その上へと幾らでも欲しがつて來て満足するといふことがない。本當にその物が我が所有になつて居らない證據であり、吾々が自分の周圍に對して正しい態度を執つて居らない證據である。今日世界の大問題も茲にあると思ふ。みんな幸福を求めて居る、幸福を求めるといふことは、吾々にとつては物を自分のものにするといふことで金が欲しい、名譽が得たい、愛情が欲しいと朝から晩までそれにかゝり一生の間押し通してゐる。殊に現代は一般に總てが進歩して來て周圍の開拓せられたことは恐らく人文始まつて以來ないことでありませう。吾々一市民の今日の生活の分量、内容本當の價値といふものはそれは驚くべき高價なものであるに相違ない。けれど

もそれをいつも時價に換算して僅かの金で以て總てのものを決めようとか、その爲に世の中が幾ら進んでも吾々は満足しない。親しく日本に例を取つて申せば、明治以來半世紀以上を経て、是位完備した周圍をもつて居るにも拘らず、一方人間の味解力や、人格の教養といふものはそれ程に進歩して居ない。却つて周圍が進むに反比例して段々人心が輕薄になり、何か知ら八釜しくなつて來る、然るに人間のやることはと申すとたゞ周圍を立派にしようといふことのみにかゝり果てゝ居る。一國の經濟から云つても亦、みんな考へて居る頭のみ使ひ方から見ても、周圍さへ立派にして行つたら、みんなが幸福になるとのみ考へて居る。にも拘らず周圍は非常な長足の進歩をしたが、實際生活の中味は段々薄くなつて全く逆の現象を現はして來て居るのはどうしたものでありませう。

志願の成就

是は今日世界の賢い人達が既に氣が付いて居つて、一體是はどういふ風にしたら宜からうかと考へて居る處である。そこでこの佛の教から申すと、吾々の願ひが満たされるといふ。他の言葉で申せば、自分程幸せの者はないといふ幸福を感じるには、相應しからぬことをしてはいけな、當然吾々の立つべき處へ立たなければならぬ、考ふべきことを考へなければならぬ、物の價値を知るには唯金ではからずに、先づ第一に傲つて居る態度を止めて、本當に謙虚な心でものに對する、それが願ひの満たされる處であり、幸福を感じる處であり、その時に初めて物が本當に自分のものになるといふのである。

先頃聞いた話であるが、曾て或人が若い頃、天龍寺の峨山和尚に參禪して居つた時、和尚が手水を使つて、その水を小僧に捨てさせた。そこで小僧は何氣

なしにその水をさつと大地にこぼすと、和尚は非常な劔幕でその小僧を吐りつけた、側で聞いても手に汗を握る程にはらはらしたと云ふ。漸く小僧があやまつて赦しを得て引退つた時に、そのお客の誰か「どうしてそんなにお叱りになるのか」と尋ねると、和尚が言はれるには「水は草木の食べ物だ、それを捨てるならば草木に與へたらよい。大地に溢すといふのは水の命を取ることだもの、命を取るやうな者は佛道修行は出來ない」と。それをその時聞いて居つた人は今日も尚ほ思ひ出して背に冷汗を感じると申して居ります。

これは何でもないことのやうであるが、和尚は何も水を經濟上の立場から考へられたのではない。水の本當の價値を知つて居る先輩が、平氣でももの命を取つて知らずに居るその後輩を教へられたのである。蓮如上人が廊下に落ちて居る一枚の紙切を兩手に戴かれて佛のものを粗末にしては勿體ないと言はれた

といふことは有名な話であります、斯ういふ人達は皆人間の立つべき處に立つて、ものゝ正しくあるべき姿、本當の價値を認められたものであります。

今この本文に依ると、吾々人間の立場に立つ限り物を盗まずには居れない、物の命を取らずに居れない、その立場から離れるにはやはり佛の教へに順ふ外はない。佛の教に順ふといふことは、人間の常識の傲慢な立場を離れて、恭ひ敬ふ處の態度に立つことである。それより外吾々は盗みを離れるといふことは出来ない。物を盗むものであるから自然の法則の如く本當の満足といふものはない、あるべきものが自分の物になつて居れば、そこに疚しいこともなければ不満といふこともない。併し物の命を盗めば自然にさからつて居るために、眞

贅澤しても
龜末にする

に心に幸福、満足を感じる事が無いのである。

或る人が數年前に亡くなられる時、子供達に遺言をされた、それ

は極めて簡単な言葉であつて、「わしはお前達に別段言ふことはないが、たつた一言云ひたいことがある、それは、贅澤しても粗末にするな」といふことだ」と言つて亡くなられたといふ。暫くその遺言の意味が分らなかつたが、段々佛法の話聞く中によくのみこめて來た、「贅澤しても粗末にするな」といふことは寧ろ吾々は今現に恐ろしい贅澤をやつて居る、金の上からすれば僅か一錢五厘の葉書でも、それが日本中支那朝鮮までも行く、僅かの金で、電話がかけられる、電報が打てる、毎日朝から晩までラヂオの放送が聽ける。これ等は時價に換算すれば何でもないが、その物の有つて居る本當の値打といふものは、測るべからざる大きな功德がある。それを吾々は忘れて平氣で居る。物の値打を認めないで、それを殺して使つて居る。その結果自分自身が少しも幸福を感じられない。これは今日吾々が最も反省しなければならぬ大きな問題であつて、そ

れは同時に又正しい宗教が人生に向つて要求するところの事柄である。それは何も難かしいことを云つて居るのでも何でもない、自分自らの生活を正しく反省すれば、さういふやうな大きなものが、何時も吾々の周囲に横たはつて居る。それを知らずに平氣で物の命を取つて居る、盗んで居る。その結果として朝から晩まで始終不満不足で居る。それが積つて來れば一生涯の間不満不足で暮さなければならぬといふことになるのであります。

盗みと
怖れ

泥棒が盗んだ金で料理屋か何處かで遊興してゐる時、隣で何かガタツと音がしても、御用の聲がかゝるのでないかとヒヤツとするといふ。夫はあるべきかたちに居らぬ生活を續けてゐるから、一寸した事にも脅かされるのである。彼が一旦刑が定つて、刑務所へ收容せられると、どんな大きな物音にも驚かぬと申します。彼はあるべき處であるのに、疚しい心

がないからである。吾々が死を怖れたり、不幸火難を恐れるのは、その奥底に天地のものを盗んでゐるからと思ふ。吾々は常に自分の心が正しい處に据はつてゐないことには決して氣がつかない。唯、この不自然の生活が時あつて、遊興の泥棒のやうに何かの音に驚かされる。その怖れは心の据はり場の間違つてゐることを警覺してくれる使者である。この怖れから反省してゆけば、自分等が興へられてゐるもの、命を盗んでゐることに氣付くに相違ない。併し上にも述べたやうに、吾々は吾々の力ではどうしても、之を改めることは出来ない。それは坐つてゐる座蒲團を自分で除ようとするやうなものであるからだ。こゝに残された道は唯一つである。之を知つた時に、慚愧するばかりである。慚愧は吾々の傲慢の心を謙虚にしてくれます。一枚の紙切れにも敬虔に頭を下げる時に、ものの正しい價值が實現して、ものと心が一枚となつて輝きます。こ

れが如のすがたである。「自分程仕合せのものはない」といふ思ひが心の奥から泉の湧くやうに出る。これこそ佛のみ心であり「盗みの罪を離れることを修め、その功德にて、人々の求め」を満し給うた處であります。此短い本文の中に、かうした深い人生味がかくされてあるのに驚いて、最終の講義に持ち出した次第であります。

跋

先達放送中、某氏から「もつと適当な言葉を使用し、もつと慎重な態度でやつて貰ひたい。少くとも原稿を作つてそれを精練して放送して欲しい」と縷々申込まれた。

成程全然耳丈けに訴へるもので、時間が二十分と来てゐるのだから、適當の言葉を使ふことに豫め研究して置くことは必須なことに相違ない。是は幾分注意してはゐたのであるが、かう云はれて見るともつとやらねばならぬと激励せしめられた。併し原稿を作つてそれを精練してやるといふことには同意しかねた。一寸考へると、それに同意し兼ねるわけはないやうであるが、こゝに大きな問題がある。

英米ではペーパーを読むといふことは、只の講演よりは寧ろ珍重せられる。これは國語の性質によることだと思ふが、併しそれだとして宗教的の講演や説教は矢張り朗讀式のもの、十人が十人まで稱讃されては居らぬ。どこの國でも活きた話は拵へ過ぎてはいけない。

尤も斧鑿の跡を止めないで、辭句も嚴選し内容もしつかりして、熱もあり調子も調うた講演は出来ないわけはないが、併し少くとも宗教上のことに關する限り、それとても餘り準備に凝り過ぎると、藝術的、教育的には成功しても宗教の第一義的には是認することは出来ない。

宗教的に重要事といふべきものはその一席の講演を貫く内容である。つまりその人の平素の體驗である。それが一席の講演の一角に意識無意識に滲みいで、對手の心に迫ることである。目指す處は純一にそこにかゝるべきだ。言葉遣

ひや、表現法や、調子の整不は第二、第三である。いふまでもなく、そこにも程度があつて、何をいうてゐるか解らぬとなつては、問題にはならないが、大體三十年近く教壇に立つてゐる者には、實は上手になり過ぎて困る位で、いつも缺けるのは前記の話の内容である。

かういつても、平生さへ注意して居ればいつ壇へ立つてもやれるといふのは無論ない。どんな名人でも苦心があらう。否名人になればなる程、凡人の知ることの出来ない苦心をもつに相違ない。それは自分自身に批判の尺度が高くなるからである。だから吾々凡人に取つては、いざ話すといふことになれば、必ず準備が要る。すつかり準備が出来ても、それが朗讀にあらざる限りは、その壇上に創作が可能である爲めに不安がある、これを除く爲めに、私に注意してくれた人のやうに豫め原稿を拵へて、それを幾度も精練して役者がセリフを

暗記するやうにしてかゝるといふことになるのであるが、高い批判からすれば、これは是認され得ない。

但しラヂオの放送講演といふものも、もつと研究する必要あり、或はその研究の結果、先の注文に應ずる程度で充分であり、それ以上の所謂名人氣質式な欲求は、活動寫真に歌舞伎劇や人形芝居を要求するやうな愚なしわざかも知れないが、若しさうとすれば、自分の眞價はともあれ、自分自身としては放送講演に落第する外はない。つまりは大衆食堂に用ゐる器物は別に名人の作品を用ゐる必要はなく、又用ゐることも出来ないかも知れず、況んや自稱名工と自惚れる作品はその間に介在しても有難迷惑の外はないと同じことでもあらう。もうかうなるとすれば先づ沈黙するの外はない。

一體大衆化、社會化といふことを離れては宗教も藝術も存在の意味はないと

論ずる人がある。そして事實上交通機關や各種の生活機能の發達とともに、それが議論の如く實證されてゐるやうでもある。即ち大衆と離れたものは一體存在しなくなり、苟も存在してゐる以上は、必ず大衆と連つてゐるからである。

併し問題は又こゝに横はる。只大衆の爲めの大衆化は、却つてやらぬ方がましのことがあるといふことだ。宗教や藝術は殊にさうである。徒らに高く止るのも考へものだが徒らに下げて仕舞つては何でもないことになる。

話の甘いのがよいといふならば、何んといつても、落語家や講談師である。中にはほんとうに甘いなあとしみぐと思はせる。時には感激さへもするが、併しいくら甘くとも落語であり講談であつて、感心はしても、尊いとか有難いといふことはない。無論宗教の話だとて、一から十までさうした感情を起さしめる譯ではあるまいが、その話の根柢に一脈のさうした感情が潜流してゐなく

ては嘘だ。言葉がはつきりしてゐるとか、よい理解を與へるとか、例話が適切であるとかいつてもこの尊い、有難いといふものを缺いては、よくやればやる程、講釋師に近づくの外はない。さうでありながら本人も満足し、聽衆も満足してゐては、一體何をやつてゐるのか解らぬ。造花を作つて喜び、眺めて喜んでゐると同じことだ。それがいくら流行つても、いくら賣れても何んでもない只それ丈けの話だ。事務家や、統計を喜ぶ教育家や、どんな心理現象でも同じ價値と見る心理學者に取つては、どれでもよからうが、眞實の世界とは甚だ遠い。

中學時代から自分は書の下手なのに呆れたものだ。よく友人が、「君の字は鮑屑のやうだ」といつた。呆れた位ならよいが、寺にゐた頃葬式の導師となつて自分の書いた法名を拜むとなると、自分ながら何十回冷汗を流したか知れない

それで遂に一年ばかり法帖に親しんだ。毎朝墨を磨つて紙をのべ法帖を擴げておく。さうしておけば嫌でもかゝねばならぬ。先輩の注意で初めから「義之」に嚙りついたが、齒が立たぬ。土臺が不器用なので、どうしても似た字が出来ない。強ひて眞似すると勢ひが抜けて仕舞ふ。それでもこりすやつてゆく中に、何んだか前よりは力の入つた字がかけるやうになつた、吹けば飛ぶやうな鮑屑か、土塊か小石のやうに重い字が出来て來た。不恰好でも自分の字が出来るのでないかと思ふやうになつた。

後で解つたのであるが、字は自分のやうな下手がよいのだと知つた。書家になつて、書で飯を喰ふにはさうはいけまいが、吾々素人が書をかくのはほんの餘技であるから、何も書道の法則に叶ふ形式の完美は要らぬ。只力の入る字が出来ればよい。技巧はその上の話だ。否な素人にあつては技巧が進むといつし

かマンネリズムに陥つて、性の入らないものとなり、本人や側の者が好い氣持ちになつてゐるだけで、實は何も書いてゐないといふ喜劇に終ることがザラにある。

素人の書畫に志す人は茲に深刻な反省と要心が要る。宗教家の口も筆も斷じて、末技に奔つてはならぬ。器用な人は矯め、不器用な人は安心して進むことだ。

昭和九年六月二十日初版印刷
昭和九年六月二十五日三千部發行

定價五拾錢

佛敎の要義



著者 山邊習學
發行兼印刷者 西村七兵衛
印刷所 内外出版印刷株式會社
京都市西洞院七條下ル

發行所

京都市正面烏丸東入
振替穴阪一七〇四番
名古屋市中區大池町五ノ元
振替名古屋一三五二番

破法 塵藏閣

山邊學習著作書

書名		定價	送料	書名		定價	送料
赤沼氏 と共著	教行信證講義(卷三)	二、〇〇	、三六	巡禮と戰塵	二、〇〇	、〇八	
佛教に 於ける	地獄の新研究	二、五〇 書及紙 〇〇	、一二	釋尊及び其救濟	二、〇〇	、一〇	
佛教文學(佛敎思想大系 第九編)		二、〇〇	、一二	宗敎的反省	一、〇〇	、一二	
アダムス、マツク夫人と共譯 "Buddhist Psalms" (英譯、三帖和讃)		二、五〇	、〇六	佛敎と日本文化	、五〇	、〇六	
理想と現實		一、八〇	、一〇	佛敎精要	、七〇	、〇四	
佛敎概説		一、〇〇	、〇六	信仰と批判	一、二〇	、〇六	
聖者の後から		並特 一、七〇〇	、〇六	改訂版 佛敎弟子傳	二、五〇	、一二	
聖典文學の見方		一、〇〇	、〇六	宗敎と文化	、五〇	、〇四	
女性創造		二、二五	、〇二	お釋迦様と日本	一、〇〇	、〇二	

發賣法藏館

佛教偉人叢書刊行趣意書

近來佛教の研究は各方面に亘りて隆盛を極めてゐるが、或は専門に陥り、或は平俗に流れて、真に一般讀書子の要求を満し得るものは甚だ罕である。特に佛教偉人の眞面目を語る著述に於いては一層この感を深くする次第である。

本會は此に鑑る所あり、一流の諸大家又は新進の諸名士に依頼して本叢書の刊行を企てるに至つた。各冊に一貫するテーマは、徒に事實の叙述に止まらず、此事實に即した偉人の思想信念に分け入りて、其全貌を描き出し、千歳の下全く時代を同うして其高風に浴し、其心琴に觸るゝの感あらしめんとするにある。

従つて本書は書齋から街頭への呼びかけである。廣い研究の裾野に聳ゆる芙蓉峰の如く、又は好く味解せられたる花壇に咲き誇る名花に譬ふべく、日本精神の廣く唱導せらるる今日、本叢書は實に其内容表現であらねばならぬ。時は怡も佛誕二千五百年の記念すべき好期に會し最初に「大聖世尊」と日本の教主「聖德太子」を刊行することを得たるは。其儘本叢書の輝かしい完成を前祝するが如く、以下各篇の續刊せられ行くことは本會の喜びとする所である。

平易にして適確な内容は高雅な装幀と相俟つて教界に時ならぬ光輝と驚異を惹き起すことは疑ひを容れない。敢て一般諸彦の深い同情と理解を仰ぐ次第であります。

佛教偉人叢書刊行會

龍谷大學學長 花田 凌雲
文學博士 鷲尾 順敬

大谷大學教授 赤沼 智善 監修
佛教文化協會主幹 山邊 習學

佛教偉人叢書

○ 推獎の辭

住田 智見

法は法のみでは、尊とさが知れぬ。人に體現され實修されて始めて其法の威徳が尊とまれる非常時の叫ばれる現代に於ては、特に其の指針たる人格者を翹望するの切なるものがある。此際『佛教偉人叢書』の發刊を企畫せらるゝは、眞に適切であり意義の深き感するのである。お互に如法修行を念ぜんとする者は、この叢書に顯はるゝ人格を指針として、踏みしめて其日々々々を進取したいと思ふ。これ『佛教偉人叢書』を世に推獎する所以である。

花田 凌雲

○ 凡そ人格の修養は偉人の言行を鑽仰し以て自己反省の資に供するより善きは莫し、書肆法藏館が佛教偉人叢書を發刊して現代の讀書士に提供せんとすることは、其の意義蓋し甚だ深きものあるを思はずんば非ず、近時都鄙擧げて日本精神の唱導に専心せざるなし、而かも其の要は國民各目の自己完成に存す、個人的人格にして完からざるものあらんか日本精神果して何者が存するあらんや、宜しく高言壯語徒らに自から高ふするの狂態を捨て、深く自から養ふ所あるべきなり。借問す鏡裏何者か映する、偉人の言行以て鏡とすべきなり、敢て本書の刊行を推賞する所以なり。

大谷大學 教授 赤沼智善著

釋尊

四六判 四六〇頁
定價 貳圓
送料 拾貳錢

中外日報評——こゝに佛教偉人叢書刊行會なるものが生れ佛教學界に於ける諸權威又は新進學徒を動員して書齋から街頭への喚びかけとして、佛教偉人の思想信念に分け入りてその全貌を描き出し之を世に問はんとしてゐることは、時恰も二千五百年の記念すべき好期に際しきことに意義ある文化的事業と云はなければならぬ。「釋尊」は即ちその第一巻として谷大教授赤沼智善氏の手によつて刊行されたものである、教授はもとより佛教學界の至寶であり稀に見る信念的な人格者であり、その學的功績の偉大さは夙に學界の驚異として知られてゐる人であるだけ、その勞作に成れるこの一巻こそは正に此種類書中に遙かに冠絶する高き學的價值を要請されていゝものである。章を分つ事五章、第一章釋迦族、第二章釋尊の御時代、第三章釋尊の成道、第四章佛陀の説法、第五章釋尊の晩年と入滅、而して更に節を分ち項を設けて平明的確な敘述を進めると共に各章毎に嚴密な註を施しその出據典籍を明かにし且つ懇切なる考證を加へて此書の權威をいよく重からしめてゐるなどこの人ならではと思はせられるものがある。

法藏館

大谷大學前教授 稻葉圓成著

聖德太子

四六判 三二〇頁
定價 壹圓五拾錢
送料 十二錢

『日本精神と佛教』研究の好參考資料

佛敎偉人叢書	第一	聖德太子傳概要
第二	氏族制度の發展と國體の危機	
第三	聖德太子の御政治(上)内治	
第四	聖德太子の御政治(下)外交	
第五	聖德太子の三寶興隆	
第六	太子が闡顯せられたる佛教の本質	
第七	聖德太子と日本文化	
第八	上宮王家の滅亡と太子の理想實現	
第九	太子の觀變遷	
第十	太子と親鸞聖人	

第參卷以下續々刊行

新譯佛教聖典 (國民版)

○全日本國民の期待に應ずべき佛教聖典は出てたり。
 ○全日本佛青聯盟は、本年の佛誕二千五百年を記念すべく、佛教協會と合同して米人ゴダード翁の手によりて本聖典を目下英譯しつゝあり。

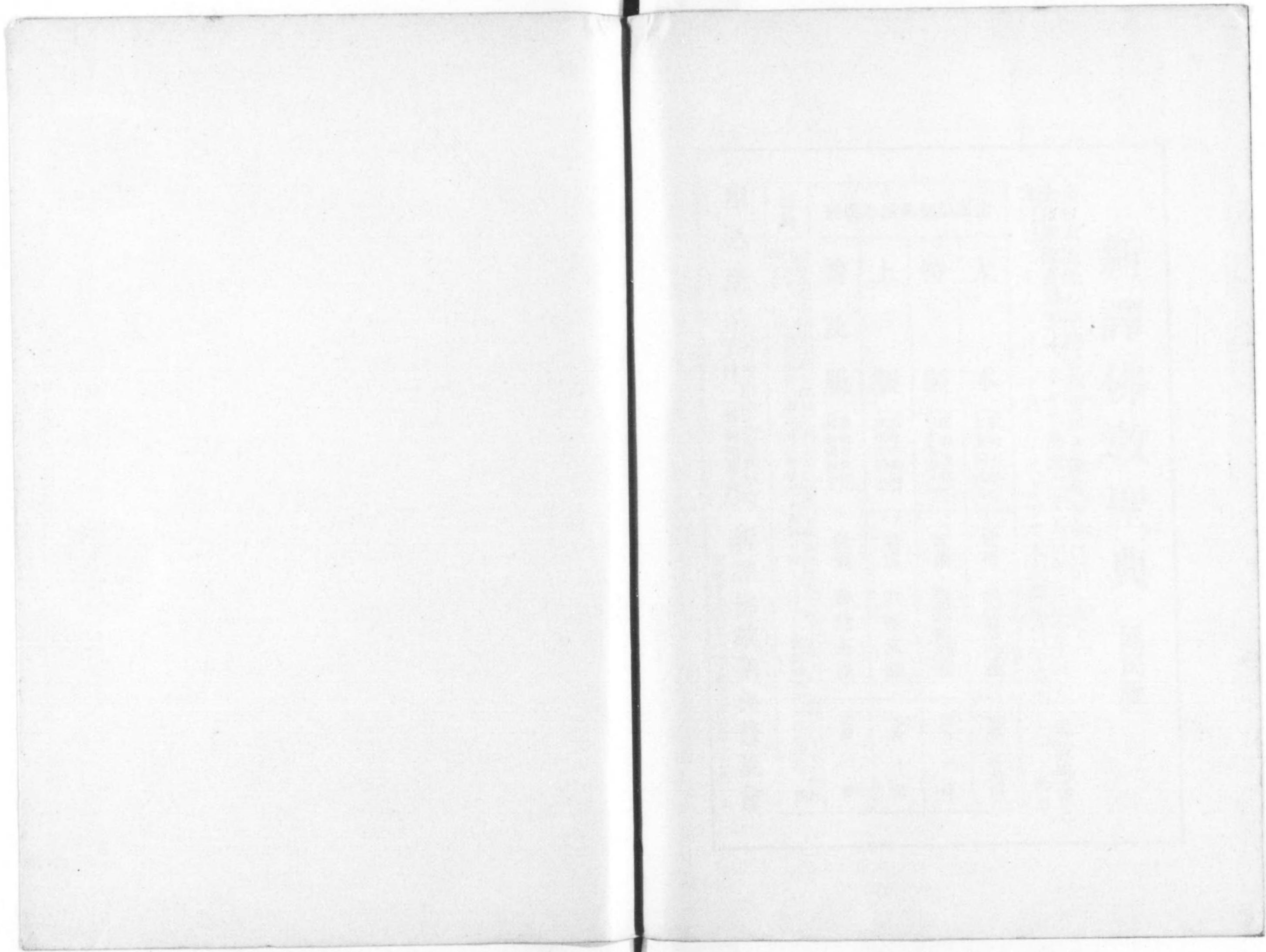
國民版聖典頒布價表			
大	本 (菊版大字 布製函入)	定價 貳圓五拾錢	送料 貳拾錢
特	製 (縮刷折革 三方金函入)	定價 壹圓貳拾錢	送料 六錢
上	製 (菊版半截總 革製本函入)	定價 六拾五錢	送料 六錢
普	及版 (菊版半截假 綴紙表紙本)	定價 參拾五錢	送料 六錢

備考 ○御注文は振替口座を御利用下さるのが最も確實御便利であります。○送料は必ず御添へ下さい。○代金引換の御注文は勝手乍ら御断り致します。○郵便切手代用は壹割増に御願ひ申します。

申込所 名古屋市中區南武平町
三丁目 (佛教協會内)

新譯佛教聖典普及會

電話中 ③三三二一四・振替名古屋 二二六一六



終